
神々の黄昏

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の黄昏

【Nコード】

N80190

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ブリュンヒルテと巡り会ったジークフリートは旅に出る。そこで立ち寄ったギービヒ家にいたハーゲンは何とアルベリヒの息子だった。彼は指輪を手に入れようと暗躍をはじめ。ニーベルングの指輪最終夜です。壮大な話がここで遂に終わります。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

舞台祝典劇　ニーベルングの

指輪

第三夜　神々の黄昏

第一幕　ギービヒ家の者達

暗闇の中でだ。三人の女達がいた。

一人は白い髪の子でその目は黒い。鋭い顔をしている。

一人は灰色の髪でその目は青い。穏やかな顔をしている。

最後の一人は黒い髪でその目は緑である。幼い顔をしている。

三人は輪になっておりそれぞれの手に糸を持ちそれはつながっている。白い髪の子は赤いドレスを着ており灰色の髪の子は青のドレスだ。黒い髪の子は緑である。三人共同じ髪型で長く伸ばしている。

「ヴェルザンティ」

白い髪の子が自分と同じ白い糸を持つ灰色の髪の子に声をかけてきた。

「あれは何？」

「どうしたの、ウルズ姉さん」

「あれが見えるの、貴女には」

ウルズはこうヴェルザンティに問うてきたのである。

「あの光が」

「夜が明けるの？」

「いえ、あれは」

だがここで黒い髪の子が言ってきた。

「違うわ」

「ではスクールズ」

「あの光は何だというの？」

「ローゲよ」

スクールズは二人に彼の名前を告げた。

「姉さん達、あれはローゲよ」

「ローゲが」

「輝いているのね」

「そう、ローゲの軍勢が燃えているの」

「こつ表現するスクルズだった。」

「炎達が」

「そうなの、ローゲが」

「今また」

「まだ夜よ」

「スクルズはまた言ってきた。」

「だから系紡ぎと歌を止めないでおきましょう」

「けれど」

「しかしここでヴェルザンティが言ってきた。」

「それは」

「それは？」

「この糸をどうしようかしら」

「こつ言うのである。」

「この糸を今は」

「私は」

「ここでウルズが言ってきた。」

「今は上手くいくかどうかわからないけれど」

「わからないけれど」

「この糸で時の網を作り歌いましょう」

「そうするといつのである。」

「かつて私達は世界のトネリコの樹に」

「あのユグドラシルに」

「ヴォータンが槍を作ったあの樹に」

「そう、あれに糸をかけて網を作った頃は」

「その頃のことを話すのである。」

「木の聖なる枝が大きく幹から出て森の様に緑に茂っていた」

「そう、かつては」

「そうだったわ」

ヴェルザンティとスクルズもそれで頷く。

「長い間」

「そのままだった」

「冷やかな木陰には泉が音立てて湧き波は叡智を語りつつ流れていました」

それも昔のことだった。

「かつては」

「しかし今は」

「変わった」

「そう、変わった」

そう話していくのだった。

「一人の大胆な神が来て」

「そうして」

「何もかもが変わった」

話は続く。

第一幕その二

「その泉で水を飲み片目を支払い」

「そう、そうして」

「それによつて変わった」

後の二人も話していく。

「その神ヴォータンによつて」

「世界は変わった」

「そう、彼が変えたのです」

ウルズはここでまた言った。

「トネリコの神木から枝を一本切抜き槍を作った」

「あのグングニールを」

「それを」

それをだというのである、

「大樹は長い歳月の間に弱り葉は色褪せて落ち」

「全てはヴォータンが大樹から槍を作ったことによつて」

「それで」

「大樹は枯れてしまった」

そうなつたと語られていく。

「泉の水も枯れてしまった」

「その代わりにヴォータンが立った」

「神々の王として」

「その深い叡智と共に」

それが彼の力、権力だったのである。ユグドラシルに代わつたのである。

「そして今は」

「そう、今は」

「大樹もなく」

二人も言つていく。

「時の綱を作るのには檜の木で」

「それを使わなければならない」

「その通りです」

まさにそうだと話すウルズだった。

「さてヴェルザンティ」

「ええ、姉さん」

「次は貴女よ」

「私が」

「私は過去を司る時の女神」

彼女はそれだという。

「そして貴女は」

「私は現在の女神」

それだというのである。

「その私が」

「そう、貴女が」

まさに彼女がだというのである。

「次は」

「それなら」

その言葉を受けてであった。ヴェルザンティは静かに話しはじめた。

「私が」

「ええ、お願い」

こうしてヴェルザンティが話しはじめたのであった。

「そのヴォータンは」

「ええ、彼が」

ヴェルザンティのその言葉を受けて交代したのだった。

「その槍の柄に熟慮を重ね」

「そう、そして」

「そこに」

「古代文字の誓約の文字を刻み」

そうしたというのである。

「この世界を支配する証とした」

「そうでした」

「かつては」

「そしてその槍を」

ヴェルザンティのヴォータンへの言葉はさらに続く。

「ある大胆な勇者が打ち砕いた」

「戦いにより」

「粉々に」

「そう、砕いてしまった」

そうしたというのである。

「誓約の神聖な文字もその時に砕かれてしまいました」

「永遠に」

「彼のその証が」

ヴェルザンティの言葉は今は過去を話していた。現在の女神ではあってもだ。

第一幕その三

「そこでヴォータンはヴァルハラ勇士達に命じ」

「あの英雄達に」

「エインヘリヤル達に」

「そしてその世界中の枯れた枝を幹と共に切り碎いてしまった」
「それがあの戦いの後の彼の行動だったのだ。」

「かくてトネリコは地に倒れ泉も永遠に枯れてしまった」

「何もかもが」

「それで永遠に」

「それで私は今は糸を」

彼女の方の糸はである。

「尖った岩に巻き付けています」

「今は」

「あの大樹もなく」

「それではスクールズ」

今度は彼女が妹に顔を向けた。

「貴女が」

「私が」

「そう、未来の女神の貴女が」

彼女がだというのだ。

「歌をです」

「そう、私の歌を」

スクールズは自分のその糸を先にやりながら話していく。

「それからの話を歌に」

「そう、私が歌に」

「そうするのです」

そうせよというのである。

「未来を司る貴女が」

「わかりました」

スクルズは姉の言葉に頷く。そうしてだった。

歌う。彼女の歌をだ。

「巨人達の建てた城は聳え立ち誇らかにそそり立ちその広間に彼等
はいる」

「ヴォータン達が」6

「神聖な神々や英雄達が」

その彼等が集っている場所なのだ。

「そこに砕かれた薪が山の様に積まれている。それこそが世界樹」

それが今はそうなっているというのだ。

「やがてこの薪に火が点けられ」

「そしてそれが燃え上がり」

「輝ける宮殿を貪欲に焼き尽くす」

彼女達の目には見えていた。

「そして永遠の神々の終わりが近付いているのです」

「誤りなく」

「それは」

「姉さん達は」

スクルズはさらに話す。

「網を。私の歌の続きを」

「夜明けなのでしょうか」

ウルズが言ってきた。

「それとも夜が光るのか。私の目は曇っていて」

「曇っていて」

「そうして」

「神々の古いことも見極めされない。かつてはローゲの炎が燃え上
がっていたのに」

ローゲの名前がまた出て来た。

「彼は今は」

「ヴォータンが槍の魔力で彼を抑えていました」

ヴェルザンティが話してきた。

「ローゲは彼に多くの忠告を与えてきました」

「そう、かつては」

「そうしてました」

「何故なら彼は自由の身になろうとして彼の齒は槍の柄の文字をかじり」

ルーン文字である。

「その知恵を得ていました。しかし」

「そう、しかし」

「そうして」

「ヴォータンはその槍の力でブリュンヒルテの岩の周りに彼を縛り付けていました」

「そうしたというのである。」

「しかし何故か彼はそれを喜んで受けていました」

「そうでした」

「その時は」

「しかし」

ヴェルザンティはさらに話していく。

「その彼はどうなるのか」

「彼は今自由です」

「そうなっているというのだ。」

第一幕その四

「彼は今は槍の破片を胸に持っています」

「そうなのですか」

「今は」

二人の姉はスクルズの言葉に頷く。

「しかしローゲは」

「何を望んでいるのか」

「その破片からさらなる力と知恵を手に入れた彼は」

さらにだと歌われる。

「ヴォータンの望みを知りました」

「ヴォータンの」

「その望みを」

「そうです」

知ったというのだ。

「そしてヴォータンが彼を再びヴァルハラに導いた時」

「その時は」

「どうなるのか」

「それは何時か」

三人の歌は続く。

「何時になるのか」

「夜が遠ざかっていく」

ウルズが言った。

「私にはもう何も見えない。網の編み目すらも」

「それすらも」

「既に」

「そう、見えなくなつた」

そしてさらに歌っていくのだった。

「網もこんがらがり一人の男の荒々しい顔が私の心を恐ろしく乱す」

「その男とは」

「誰なのですか？」

「アルベリヒ」

この名前が出て来た。

「かつてラインの黄金を盗んだ男。あの男は」

「網が」

今度歌を出してきたのはヴェルザンティだった。

「網が岩の尖った先に突き刺さってしまった」

「糸は大丈夫なの？」

「それで」

「今は大丈夫です」

今はというのである。

「ですがあまり強く引つ張らないで下さい」

「わかったわ」

「それは」

二人もそれで頷くのだった。そして実際に手を緩めた。

そのうえでだ。さらに歌は続く。

「ニーベルングの指輪が。あの指輪が危急と怨恨の中から浮き出て見えます」

「その指輪が」

「それが」

二人はヴェルザンティの言葉に答える。

「その復讐の呪いがですね」

「それが」

「そう、それが私の網を噛んでいる。未来はどうなるのか」

「網が緩み過ぎて私まで届かない」

「スクルズが応えてきた。」

「この端を投げるには」

「けれど」

「もう糸は」

「あ………」

そしてだった。まずはスクルズのものだった。

「切れた」

「私の糸も」

「私のものも」

ヴェルザンティとウルズのものもだった。全て切れてしまったのだ。

三人の女神達の声は愕然としていた。その中での歌だ。

「永遠の叡智の終わり」

「世界は賢者達の言葉を聞くことはもうない」

「では我々は」

「もうこれで」

「母上の世界に戻りましょう」

彼女達は深く沈んで行った。そのまま姿を消していく。何もかもが消え去った。

あの岩場だった。炎はないが荒涼としたままである。ジークフリートはそこに立っている。その後ろに今は槍と盾を持っていないブリュンヒルテが立っている。

第一幕その五

その彼女はだ。豊かな黄金の髪を風にたなびかせ。そのうえで彼に声をかけてきた。

「ジークフリート」

「何だ？妻よ」

ジークフリートは前を見ていた。そこには朝日がある。鬱蒼と茂った森の向こうにその黄金の光がある。彼はそれをじっと見ているのである。

「何が」

「貴方を愛していても新しい世界へ行かせないことはしないわ」
「送り出してくれるのか」

「ええ」

まさにそうだというのである。

「貴方にとって私は価値のない存在にも思えたけれど」

「それは違う」

「そう、それもわかったわ」

こう答えたのである。

「私が神々から教えられた全ての知識は貴方に授けた」

「私はミーメに多くのことを教えられた」

それは事実だった。しかしなのだ。

「だがそれでも今は」

「そう、今は」

「私は貴女からそれ以上のものを教えてもらった」

「そして貴方は私から乙女としての強さを奪った」

それをだというのだ。

「だから私は今は貴方のもの。知識と力の代わりに愛と希望を得た」

「それが今の貴女」

「そう、それが今の私」

「そして今の私は」

今度はジークフリートから言ってきた。

「私には貴女がある」

「私が」

「そう、貴女がある」

前を向いたままだ。そのまま語っていく。

「そのただ一つの知だけは失わない。私はブリュンヒルテを想うと
いう一つの教えを学んだのだ」

「私に愛の証を示そうというのなら」

「その時は」

「自分のことを思うこと」

「私自身のことを」

「そう、そして貴方の行いを」

次にはこう語った。

「そしてあの恐ろしい炎のことを。貴方は岩の周りに燃えていた炎
を何の恐れもなく越えた」

「貴女を得る為に」

まさにその為だった。

「その為に」

「楯を持っていた女を思い出し、そして深く眠っていた乙女を見出
しその兜を切り破った」

「貴女を目覚めさせる為に」

「私達を結ぶ誓いを忘れないで」

今度はそれだという。

「私達が担う貞節を。その中に生きる愛も全て」

「その全てを」

「そう、そうすれば私は永遠に貴方の胸に神聖に燃え続ける」

「では私は」

ここでブリュンヒルテの方を振り向くのがだった。

「炎の聖なる守護の下に愛する貴女を委ねよう」

「ローゲに」

「貴女の知恵に対して」

「ここであるものを差し出してきた。それは。

指輪だった。血塗られた黄金の輝きを持つ指輪だ。それを彼女に差し出してきたのである。

「この指輪を」

「指輪を」

「私がかつて行った働きによりこれは私のものになった」

「その指輪こそが」

「長い間この指輪を守っていた大蛇を倒し」

「ファフナーである。」

「手に入れたこの指輪を今私の貞節の聖なる証として与えたい」

「ではそれを」

「ブリュンヒルテもそれを受け取って答えた。

「最高の宝としましょう。指輪の代わりにこの馬を」

「その馬を」

「白馬であった。それが二人の前に出て来たのである。

「ブリュンヒルテはジークフリートにその馬を見せながら。さらに話すのだった。」

「グラーネを」

「グラーネ」

「そう、このグラーネを」

「それをだというのだ。」

第一幕その六

「かつては私と共に大胆に空を走り」
「空を」

「しかし私と共にこの馬は力を失い最早雲の間も雷光閃く嵐の中も
勇敢に駆けることは適わないとしても」

その言葉を続けていく。

「貴方の行くところに、炎の中でもグララーネは向かうでしょう。こ
の馬は必ず貴方に従う」

「私に」

「そう、だからこの馬を」

「では私はその馬に乗り」

グララーネを見ての言葉である。

「そして戦いと勝利を得て来る」

「そうされるのですね」

「私はブリュンヒルテがいるからこそ勇氣に燃える」

「では貴方は自分と私も中にいて」

「そう、私の行くところ二人もまたいる」

こうブリュンヒルテに話す。

「では私の岩屋は今は何もなく」

「いや、私はここにもいる」

ブリュンヒルテの今の言葉は否定した。

「ここにも。私は貴女の中にもいるのだから」

「私の中にも」

「そう、だから」

「では私達は離れていても誰も引き離すことはできない」

ブリュンヒルテは恍惚として言った。

「そして別れていても別れてはいない

「ブリュンヒルテ、煌く星よ」

そのブリュンヒルテにまた話した。

「輝く愛よ、幸あれ」

「ジークフリート、勝利の光よ」

ブリュンヒルテもまた彼に言葉を返した。

「輝く生よ、幸あれ」

「二人に幸いあれ、永遠に」

こう言い合いそのうえで別れてである。ジークフリートは剣を手に旅立った。その前には聳え立つ高層ビルが立ち並んでいる。そこに向かってグララーネに乗り今ライン河に乗り出した。

ギービヒ家。豪華な宮殿である。水晶のシャングリラが上にあり黄金で所々を飾られ見事な芸術品が並んでいる。絹のカーテンとビロードの絨毯に覆われたこの宮殿の中でとりわけ豪華な部屋に二つの椅子が置かれている。

その椅子は横に並んで置かれており一方には男がいる。黄金の髪を後ろに撫で付け青い目をしている。見事なスーツを着ておりネクタイもしている。顔は端整で長身でもあるが何処か線が細く弱い感じがする。

彼の隣には美女がいる。黄金の豊かな髪を持っておりその髪は腰まである。湖の澄んだ目をしており透き通る白い顔は人形のように整い艶やかな紅のドレスからは見事な身体が覗いている。しかしその顔は何処か弱々しい。

その二人、男の右手に黒い軍服とマントの長身の男が立っている。無然とした顔をしており黒い髪を後ろになびかせている。そしてその右手に槍を持っている。身体は頑丈そのものでありその長身を余計に大きく見せている。その彼が立っているのであった。

その彼にだ。スーツの男が声をかけてきた。

「ハーゲンよ」

「何だ、グンターよ」

ハーゲンと呼ばれた彼も男に声を返してきた。二人はそれぞれ顔を相手に向けている。

「御前に聞きたいことがある」

「何をだ？」

「私がこのラインのほとりに幸福に無為に暮らしていてそれがギービビの名を辱めてはいないだろうか」

「それはない」

ハーゲンは重厚な声で彼に答えてきた。

「グンターよ」

「うむ」

「貴殿は正統な血を受け継いでいる」

「そのギービビのだな」

「そうだ。私はそれを羨ましく思う」

こう彼に語るのである。

「それが我等兄弟を生んだクリムヒルデの教えなのだ」

「いや、羨望するのは私だ」

だがグンターはこう彼に返した。

「私はこの家の主にはなったが知恵を授かったのはそなただ」

「私だというのか」

「そうだ、義理の兄弟が争いが絶えず和解は難しいという」

何も兄弟のことだけではないがだ。

「私は御前の助力にいつも感謝している。名を挙げるのにいつも御前の知恵を借りている」

「それは違う」

「違うというのか」

「貴殿の名声はまだ充分と言えないから」

それは不足だというのだ。

「私の助力は称賛に値しない。何故ならだ」

「何故なら？」

「私はギービビ家の手に入らぬ素晴らしい宝があることを知っている」

「その宝とは何だ？」

「ギービヒの家は夏の大樹の如く栄えているが」

それでもだというのだ。

「だが貴殿は一人身でグートルーネにも夫はいない」

「そのことか」

「そうだ、そのことだ」

話をさらに進めていく。

第一幕その七

「妻と夫だが」

「では私に妻を娶れというのだな」

「私はこの世で最も美しい女を知っている」

グンターにさらに言ってみせてきた。

「その女は高い岩の上において周りには炎が燃えている」

「ローゲの軍勢がか」

「その炎を越える者だけがその女を手に入れられるのだ」

「私にそれができるだろうか」

「止めておくべきだ」

ハーゲンはグンターには行かせようとしなかった。

「その炎はあまりにも強い。貴殿にしても私にしても焼かれてしま
う」

「それではどうするのだ？」

「より強い者に行かせる」

そうするというのだ。

「我々よりもだ」

「ではそれは誰なのだ？」

「ヴェルズングの一族」

この名前が出るとグンターの顔が曇った。そのうえで言うのだ。

「あの血塗られた一族か。まだ残っていたのか」

「その一族の最後の一人ジークフリート」

ハーゲンはその名前を出した。

「双子の夫婦ジークムントとジークリンデが熱愛から生み出した子
だ」

「兄と妹でだと」

グンターはそれを聞いてその顔をさらに曇らせた。

「それはまことか」

「まことだ。だが」

「だが？」

「その話は今は忘れるのだ」

そうしろというのである。

「そしてだ」

「そして？」

「森で育ったこの男こそグートルーネの夫に相應しい」

「ハーゲン」

ここでその美女、グンターの横にいるグートルーネがハーゲンに顔を向けてきた。

「それでその人は何をしたの？」

「欲望の洞窟にいてニーベルングの指輪を守っていた大蛇を倒した」
そうしたというのだ。

「その恐ろしい口に飲み込まれずノートウングという剣で倒したのだ」

「剣で」

「そのジークフリートこそがそなたの夫に相應しい」

「ニーベルングの指輪のことは私も知っている」

またグンターが言ってきた。

「その宝は今誰が持っているのか」

「この宝のことだが」

ハーゲンは所有者のことよりも先に指輪自体について話してきた。

「世界を治めることもできる」

「この世界を」

「そう、その指輪を持っているのはだ」

その者はというど。

「ジークフリートだ」

「ジークフリートがか」

「そうだ、彼が持っている」

「そしてブリュンヒルテを得られるのも」

「彼だけだ」

またグンターに対して語った。

「彼だけなのだ」

「そうか」

グンターはここまで聞いて考える顔になった。そのうえで言うのだった。

「ではその二つを」

「若しもだ」

そのハーゲンの言葉が続く。

「ジークフリートが貴殿のところへブリュンヒルテを連れて来たならばだ」

「私の妻に」

「それができるのだ」

「それではだ」

ここまで聞いてさらに述べるグンターだった。

「その勇者に頼み私の為に花嫁を手に入れたな」

「そしてその前にグートルーネの夫にしてだ」

「けれどそれは」

またグートルーネが言ってきた。美しい声だが何処か空虚な響きがある。

第一幕その八

「私にジークフリートを惹きつけるものがなければ」

「そなたにか」

「ええ。その最も素晴らしい勇士をこの私が」

「安心するのだ」

だがハーゲンはグートルーネにも重厚に語った。

「それもだ」

「安心していいと」

「そうだ、安心していい」

また言うのであった。

「それはだ」

「それは何故なの？」

「任せておくのだ」

今ではそのことは伏せるのだった。

「私にだ」

「それじゃあ」

「そうだ。そしてだ」

ここでハーゲンは二人に問うのだった。

「この話はどう思うか」

「いいと思う」

「私も」

二人はそれぞれこう言って賛成だと述べた。

「しかしだ」

「しかし。何だ？」

「ジークフリートは今何処にいるのだ？」

グンターはそれを問うたのである。

「彼はだ。今何処にいるのだ？」

「何処にか」

「そうだ。何処にいるかが問題だが」
「それについてはだ」
「このことについても話すハーゲンだった。
血気にはやる彼はだ」
「うむ」
「功名を求め旅に出た」
「旅にか。それでは探しにくいな」
「いや、その心配はな」
「だがハーゲンはここでこう述べた。
その心配はだ」
「ないというのか」
「彼はここに向かっている」
「この屋敷にか」
「そうだ。今ライン河を下っているのだ」
「彼等がいるその河にだという。」
「だからだ。すぐに来るのだ」
「そうか。そういえば」
「この音は」
「グートルーネも言ってきた。
角笛の音？」
「あの音こそがだ」
「ハーゲンが言ってきた。」
「そのジークフリートの笛の音だ」
「あれがか」
「あの角笛が」
「そしてだ」
「さらに言うハーゲンだった。」
「その勇者が今ここに来るのだ」
「ここにか」
「そうだ、来る」

言葉はまさに二人の心に刻み込むものだった。

「この宮殿に」

「では人をやるう」

グンターはすぐに決断を下した。

「それでいいな」

「うむ、そうして彼をここに呼ぶのだ」

そうしてであった。すぐに人がやられジークフリートが彼等の前
に出て来た。そのうえで話がはじまるのであった。

「一つ聞きたいことがある」

「何だ？」

三人は席を立ちジークフリートを迎えていた。その場でジークフ
リートが言ってきたのだ。

「この屋敷はギービヒ家のものだな」

「そうだ」

グンターが微笑んで彼の問いに答える。

「それがどうかしたのか」

「ではこの屋敷の主は」

「私だ」

グンターは微笑んでまた答えた。

「この私、グンターがだ」

「そうか、貴方がか」

ジークフリートは彼の言葉を受けた。そのうえでまた言つのであ
った。

第一幕その九

「貴方の名前は聞いている」

「君の耳にも入っていたか」

「そうだ。その貴方に聞きたい」

「うむ」

「剣か、それとも握手か」

その二つを出してみせたのである。

「どちらなのか」

「私は戦うつつもりはない」

グンターは微笑んで彼に告げた。

「君を喜んで迎えよう」

「そうなのか」

「そうだ。ところで」

「ところで？」

「貴方は私のことを知っているようだが」

ジークフリートはもうそのことを察していたのである。

「それは何故なのだ？」

「君の名前も聞いているのだ」

「そうだったのか」

「君が私の名前を知っているのと同じだ」

「私の名前もそこまで知られていたのか」

今そのことを聞いて思う顔になった。グンターはその彼に対してさらに話してきた。

「それでだが」

「それで？」

「君は何を持っているのか」

このことを問うたのである。

「それで」

「私には剣がある」
それをだというのだ。
「この剣で貴方の危急に応えよう」
「そうしてくれるのか」
「そうだ。必ずだ」
「そういえば」
ここでハーゲンが何気なくを装って彼に尋ねてきた。
「貴殿はニーベルングの指輪を持っていたな」
「あれか」
「そう、あの指輪をだ」
「そのことは今まで殆ど忘れていた」
目をしばたかせながらの言葉であった。
「それ程打ちのあるものにも思えなかったからだ」
「それ程だというのか」
「私は宝にはあまり興味がない」
「だからだというのだ」
「今持つて来ているのはこれだけだ」
「兜だな」
「ただの兜だが」
「いや、その兜はだ」
ハーゲンはその兜を見てすぐに彼に話した。
「ニーベルングの隠れ兜だ」
「隠れ兜とは？」
「それを被れば姿を消すことができる。それに」
「それに？」
「どんな姿にもなれる」
「それもできるといっているのである」
「そして何処にでもすぐに行ける。恐ろしい兜なのだ」
「そうだったのか」
「そうだ。他には何を持っているのか」

「指輪があつた」

ここで、であつた。グンターの目が光つた。だがハーゲンはそれを隠している。ジークフリート本人はそうしたことに一切気付かないまま話していく。

「だがそれは置いてきたのだ」

「そうなのか」

「そう、そしてその指輪は今」

今何処にあるのかも話していく。

「岩屋にいるブリュンヒルテが持っているのだ」

「ブリュンヒルテがか」

それを聞いたグンターの顔がいよいよ鋭いものになる。

「そうか」

「そうだ、彼女が持っている」

「わかつた」

「それを差し上げようか」

「いや」

ここでハーゲンがジークフリートに告げた。

第一幕その十

「それには及ばない」

「いいというのか？」

「我々はだ」

「君と取引をするつもりはない」

グンターはハーゲンと目配せをしたうえでジークフリートに話した。

「そのつもりはない」

「いいというのか」

「そうだ、例え我が家の全ての宝を出しても」

こうジークフリートに話し続ける。

「それには及ばないのだから」

「では私は」

「報酬なぞ望まない」

彼はまたジークフリートに言った。

「それはいい」

「いいのか」

「そうだ。それではだ」

ここでハーゲンが杯を出してきた。

「飲まれるか？」

「それは」

「葡萄酒の酒だ」

微笑みを作ってジークフリートに話す。

「嫌いか？なら麦か蜂蜜の酒を出すか」

「いや、有り難う」

ジークフリートはその申し出を断らなかつた。

「喜んで頂こう」

「そうか。それならだ」

その酒を出す。見ればそれは見事な紅の色である。しかしそこには何か微妙な黒いものも混ざっているように見えた。そうした酒であった。

だがジークフリートはその酒を受け取りだ。こつ呟いてから飲んだ。

「ブリュンヒルテよ」

この言葉はグンター達には聞こえなかった。

「私は何処にいても貴方とその教えを忘れない」

こつ言ってから飲む。そのうえで杯を置く。するとそこに出て来たグートルーネを見てだ。

「彼女は」

「妹だが」

グンターがジークフリートに答えた。

「それが何か」

「何と美しい」

彼女を見詰めたままの言葉である。

「貴女の御名前は」

「グートルーネといいます」

彼女からおずおずと名乗ってきた。

「どうぞ宜しく御願いします」

「そうか、グートルーネというのか」

ジークフリートはその名前を心の中に刻み込んだ。

「貴女の目の中にあるのはよき文字か。私は」

「貴方は？」

「私は今貴方の兄上に家臣になることは断られた」

その無報酬という言葉がそれである。

「ですが」

「ですが？」

「貴女に夫婦の契りを申し出てもそれは許されないのでしょつか」

「いや、喜んで」

グンターがこう彼に言ってきた。

「そうさせてもらおう」

「いいというのか」

「そうだ。是非君を妹の夫にだ」

「有り難う、それでは」

そしてだった。ジークフリートは今度はそのグンターに対して問うのだった。

「グンター、貴方に妻は」

「まだいない」

「こう答える彼だった。」

「残念なことにな」

「そうなのか。それではだ」

「それでは？」

「私が貴方にその妻を見つけ出してあげよう」

「こう彼に言ってきたのである。」

「それでいいか」

「その妻をか」

「そうだ。その女は高い岩の上にある」

「そこにいるのか」

グンターはここで先のハーゲンの言葉を思い出した。そのうえで

彼の話聞いていく。

「それでその名前は」

「ブリュンヒルテという」

「ブリュンヒルテ」

ここでまたグンターは心の中で頷いた。そうしてであった。

第一幕その十一

彼に伝えてだ。そのうえで話した。

「では私に彼女を」

「そうだ。しかしだ」

「しかし？」

「彼女のいる岩屋は激しい炎に包まれている」

「これもハーゲンが言うことと同じであった。

「それをどうするかだが」

「そこを通り抜けなければならぬのか」

「そうだ、だが貴方はその危険を冒すことはない」

「ジークフリートからの言葉である。

「だからこそだ」

「だからこそ？」

「私が行こう」

ハーゲンは今の彼の言葉を聞いて笑わなかった。しかしであった。

その目の光をさらに黒く強くさせてた。そのうえでジークフリートを見続けて彼の話を聞いていた。

「それでいいか」

「君がだというのか」

「そうだ、私が行こう」

彼はまた言った。

「そして彼女を貴方の妻に」

「では私はだ」

グンターもそれに伝えて微笑んで言ってきた。

「グートルーネを君の妻に」

「それでは」

「しかしだ」

ここでグンターはジークフリートに問うた。

「君が行くのだな」

「そうだが」

「しかし私が行かなくてはならない」

夫とするからにはである。

「それはどうするのだ？」

「その心配はない」

だがジークフリートは微笑んで彼の問いに返した。

「その心配はだ」

「というと？」

「私には隠れ兜がある」

ハーゲンが指摘したそれがである。

「これを使って貴方の姿になってだ」

「そのうえでか」

「そうだ。そのうえで向かう」

まさにそうだというのである。

「それでどうか」

「わかった。ではそうしてくれ」

「うむ、それではだ」

「話は決まったな」

二人の話をこれまでじつと聞いていたハーゲンが出て来た。その手にはまた杯がある。しかしその杯は今は何も入ってはいなかった。

「それではだ」

「それでは？」

「誓いをする時だ」

その時だというのである。

「今はだ」

「誓いをか」

「そうだな。兄弟の誓いをしよう」

グンターも言ってきた。

「君は私の妹の夫となるのだしな」

「我々は義兄弟となるのだな」

「そうだ」

まさにその通りだというのだ。

「それではだ」

「よし、それなら」

ジークフリートもそれを受けるところにした。

「私の血と貴方の血を混ぜ合わせ」

「そのうえで飲み合おうとしよう」

「それではだ」

その儀式に入る。まずはそれぞれの腕を持っている剣で傷つけてそこから流れる血を杯の中に入れてである。それを飲み合おうのだった。

「信義を誓って友と飲もう」

「今日の誓いが何事にも妨げられる」

二人で言い合う。

「兄弟のよしみが栄えるよう」

「どちらかがこの誓いと信義を破れば」

その時はずもいづのだった。

「今日飲み合ったこの清き血が光熱となって流れ出てその報いとなるよう」

「では今から」

「飲もう」

「しかし」

ここでジークフリートはハーゲンを見て彼に問うた。

第一幕その十二

「貴方はいいのか？」

「私か」

「そうだ。貴方はいいのか」

「私はこの家の者だがそれに入る資格はない」

「何故なのだ？それは」

「私には高貴な血は流れてはいない」

だからだというのである。

「グンターの母から生まれたがそれは普通に生まれたのではないのだ」

「？どういうことなのだ？」

「だが種をその中に宿させて生まれただけなのだ」

そうだとするのである。

「アルプの種をな」

「アルプの種を」

「ハーゲンはアルベリヒの子なのだ」

ここでグンターがジークフリートに話してきた。

「彼は愛を断ち子供を作れなくなったが」

「それでもなのか」

「その種だけを我が母に宿させてもらい」

「私が生まれた」

ハーゲンも言ってきた。

「無限の財宝と共にだ」

「そうだったのか」

「そうだ。だから私はその誓いに加わることはできない」

こう言うのである。

「悪いがな」

「そんなことを気にすることはないのだがな」

「私もそう思うのだが」

ジークフリートだけでなくグンターも言うのだった。

「しかしだ。それでもそう言うからな」

「仕方ないか」

「何分気難しい男でな」

ハーゲンをこう評するグンターだった。

「ああ言ったらもう引かない。放っておこう」

「そうか」

「それではだ」

話が戻ってきた。

「いいのだな、それで」

「今から行く」

グンターに対して答えた。

「それではだ」

「うむ、吉報を待っている」

「船で岩屋に急ぎ」

そのことをもう頭の中に入れていた。

「そのうえでだ」

「行ってくれるか」

グンターはジークフリートに言い終わるとハーゲンに顔を戻して

告げた。

「それでは私はだ」

「残らないのか？この屋敷に」

「ジークフリートと共に行く」

そうするというのである。

「私が夫となるのだからな」

「そうか。なら行くといい」

「それではな。留守を頼む」

「わかった、ではだ」

こうして二人は屋敷を後にした。残ったのはグートルーネとハー

ゲンだけだった。しかしそのグートルーネもハーゲンに顔を戻して声をかけてきた。

「ハーゲン、私もこれで」

「休むのだな」

「ええ、お兄様とあの方が戻って来られるまで」

もうジークフリートに恍惚となっていた。

「それじゃあ」

「休むといい」

こう告げてグートルーネを見送る。ハーゲンは一人になるとだっ
た。

「ここで屋敷を守りや方に迫る敵を防ぐ」

それが彼の仕事である。

「ギービヒの息子は嵐に送られ妻を求めに旅に行く。舵を取るのは無双の勇士、危険を恐れずに立ち向かう」

グンターとジークフリートのことである。

「グンターの為に自分の妻をこのラインに連れて来てそして」

言っているうちに言葉が強くなる。

「私に指輪を。さあその為に進むのだ、ニーベルングの息子である私の為にだ」

こう呟きながら自分の椅子に座る。そのうえで瞑想に入る。彼は今不気味な闇の中にいた。

ブリュンヒルテは今は岩屋に一人いた。そこに誰かが来た。

「あれは」

天から馬を駆って来る。それは彼女がかつてよく知った者だった。

「ワルトラウテ」

「姉さん、まだここにいたのね」

「懐かしいわね」

ワルトラウテを見て懐かしさを込めた笑顔を見せた。

第一幕その十三

「またこうして会えるとは思わなかったわ」

「ええ、本当に」

その天を駆る馬の上から姉に対して言ってきた。

「元気そうで何よりだわ」

「まずは馬を休ませなさい」

そうしろというのである。

「ここでね」

「ええ、じゃあ」

まずは降り立ち馬を置いてだ。暗雲漂う空から炎の中の岩屋にだ。降り立ってからまた話すのだった。

「私がここに来たのはね」

「どういう訳なの？」

「用があつて」

「その為にお父様のお言葉に背いてそれで来てくれたの」

「ええ」

その武装した姿での言葉である。ワルキューレの姿だ。

「そうよ」

「お父様のお考えが変わった。それは違うわね」

ブリュンヒルテはその考えはすぐに打ち消した。

「あの時あの二人を護ったことは」

「そのことは」

「間違っていた。けれどそれこそが」

「それはもう過ぎた話だけれど」

「そう、もうね」

そのことは彼女もわかっていることだった。ワルトラウテもだ。

「それは。けれど」

「それはお父様の願いでもあった」

ワルトラウテが姉に対して告げた。
「かつては」
「そして私はここに封じられた。この岩屋に」
「今まで眠っていたのに」
「一人の勇士が私を起こしてくれたから」
「ジークフリートのことである。」
「だから。今の私にはもう他に何もいらわないわ」
「いらないう」と
その言葉を聞いたワルトラウテの顔が曇った。
「姉さん、まさか」
「私は今は」
はつきりと告げたブリュンヒルテだった。
「満足しているわ」
「そうなの」
「それで貴女はどうなの？」
「私は？」
「そう、貴女は」
今度は自分からワルトラウテに問うのだった。
「どうしてここにいるの？お父様は恐れていないの？」
「それ以上のことがあったからよ」
「だからだというのである。」
「私がここに来たのは」
「その理由はどうしたの？」
「ヴァルハラが終わろうとしているの」
切羽詰った顔での言葉だった。
「今はもう」
「ヴァルハラが終わろうとしている？」
「貴女がいなくなつてからお父様は変わったわ」
「言葉が暗いものになった。」
「私達を戦場に送ることもなく」

「貴女達を」
「私たちはただ馬に乗り天を彷徨うだけになり。そうして」
「そうして」
「お父様はただ一人地上に彷徨われて」
「あの森に行っていたことは知らない。」
「そして帰って来られた時は」
「その時は」
「槍は粉々になっていたの」
「そうね。そしてそれを砕いたのは」
「それはわかるの？」
「一人しかいないわ」
「こう妹に返した。」
「ジークフリート。彼によってよ」
「まさか。その名前は」
「ええ。あの時にあの二人から生まれた子よ」
「彼だというのである。」
「あのヴェルズングの兄妹から」
「そう。あの二人の子供だったのね」
「彼しかいないわ。絶対に」
「そうなの。そして」
「そして。お父様はそれで今どうされているの？」
「世界樹の木の欠片を薪にして」
「そうしたというのだ。」

第一幕その十四

「それをヴァルハラにうずたかく積ませて囲ませたわ」

「その世界樹の薪で」

「そして私達をその中に置いてお父様もおられて」

「その中で動かせないのね」

「ええ」

その通りだというのである。

「ヴァルハラに集めた英雄達も私達も集めて」

「ただその中になのね」

「あの二羽の烏を飛ばしただけよ」

話の中で烏を出してきた。

「それはね」

「烏は」

「ええ、烏は」

それはだというのである。

「あのお父様の僕の二羽の烏を放ちそのうえで遠くを探らせて」

「そうしてなのね」

「彼等が戻って来て話を聞いて微笑んではいたけれど」

「そうしてそれから」

「同じになられたわ」

残念そうに首を横に振って言うのだった。

「もうね」

「そう、一緒なの」

「私達の御言葉にも耳を傾けられない。けれど」

ここでブリュンヒルテを見てきた。そうしてだった。

「姉さん」

切実な顔での言葉だった。

「それだけけど」

「それで？」

「お父様は貴女を待っておられるのだと思っわ」

「私を？」

「そう、貴女を」

まさに彼女をだという。

「それは間違いないわ」

「果たしてそうなのかしら」

ここでブリュンヒルテの言葉に自嘲が入った。笑みでもある。

「この私に。もう神ではなくなったのに」

「それでもお父様はずっと貴女のことを想っておられました」

「偽りではなくて？」

「私もまたお父様の娘よ」

「ここではこう言うのだった。

「それでどうしてわからないというの？お父様のことが」

「そう、まだ私を」

「お父様は深く嘆息され目を閉じられて夢を見るようにして呟かれましたわ」

「何と？」

「指輪はあの乙女達に返さねばならないと」

「こう呟いたというのである。

「そうすれば呪いの重荷により神と世は救われると」

「それで救われるというのね」

「それで私は考えたの」

「また姉の顔を見てきて言うのだった。

「貴女ならばと想って」

「今になって私に」

「ブリュンヒルテはそれを見て応えてきた。

「神でなくなつた私に何をしろと」

「その指輪をです」

彼女の左手の薬指の指輪を見てだ。その血の様な赤が混ざつた黄

金の色の指輪をである。

「捨てて下さい」

「この指輪を？」

「そうです」

まさにそうだというのである。

「どうか。お父様の為に」

「この指輪を捨てるというの？」

「そうです」

まさにその通りだという。

「そしてラインの乙女達に返して下さい」

「これはあの人が私に授けてくれたもの」

だが彼女はこう妹に返すのだった。

「だからこれは」

「けれどその指輪が貴女のものだと神々が」

「滅ぶというのね」

「そう。ヴァルハラが」

滅ぶというのである。

「だから何があっても」

「この指輪がどういったものか知らないの？」

ブリュンヒルテはここまで聞いて言葉を返してきた。

「私にとってどういうものか」

「神々を滅ぼすその指輪を？」

「ヴァルハラ喜びよりも神々の誉れよりももっと大切なものなの

よ

「神々よりも」

「そうよ。この冴えた色の黄金」

彼女の指輪のことである。

第一幕その十五

「そして気高い輝き、全てが神々の永遠の幸福よりも優れた値打ちがあるものなのです」

「では姉さんは」

「この指輪はジークフリートからの愛」

まさしくそれだというのだ。

「何よりも素晴らしくかけがえのないものなのだから」

「愛が」

「そう、愛が」

まさしくそれがだというのだ。

「ですから私は」

「その指輪を手放さないと」

「神々に告げなさい」

有無を言わせない言葉だった。

「私の指輪について言うのです」

「その指輪について」

「私は愛を捨てません」

まさにそうだというのである。

「神々も愛を奪うことはしないでしよう」

「その愛を」

「そう、例えヴァルハラが」

今の彼女にはそれも何の感慨もないものだった。

「その燦然たる宮殿が廃墟の様に崩壊しようともです」

「そんな、では本当に」

「帰りなさい」

またしても有無を言わせない言葉であった。

「そして伝えるのです、私の今の言葉を」

「完全に人間になってしまったのね」

「そうかも知れません」

それを否定しない彼女だった。

「私達もまた」

「否定しないというのね、本当に」

「愛を捨てるといわれるのなら」

「そう、わかったわ」

この上なく無念な顔で頷いたワルトラウテだった。

そうして。悲しい顔で姉を見てであった。

「さようなら、永遠に」

「ええ、これで」

去るしかなかった。彼女を見送ったブリュンヒルテは一人そこにたたずむ。妹が去ったその空を見ながら一人呟いた。

「この炎達に覆われながら」

ローゲの炎にである。

「私はジークフリートを待つ。あの人が帰って来るまでそのつもりだった。しかしである。」

「!?!」

異変を察したのである。

「炎が猛り狂って岩を嘗めている」

そうしていると感じたのだ。

「ジークフリートが帰って来た!?!けれど」

違うと直感した。そうしてだった。

武装した男が来た。その外見はジークフリートのものではなかった。

軍服ではなくスーツだ。それで武装していたのである。

その彼を見てだ。ブリュンヒルテは即座に叫んだ。

「誰!?! 一体誰なの?」

「ブリュンヒルテよ」

声もグンターのものだった。

「一人の男が炎を恐れず妻を求めに来たのだ」

「まさかあの炎を」

ブリュンヒルテはまずそのことが信じられなかった。

「ジークフリート以外の一体誰が」

「貴女を求めてやって来た男だ。何があるうとも」

「何故、どうしてここに。誰が」

「ギービヒ家の者でグンター」

その彼の名前を口にしてみせた。

「それが私の名だ」

「何ということ……」

ブリュンヒルテはその名乗りを聞いていなかった。他のことを呪うのだった。

「ヴォータン、恐ろしく残酷な神」

「私は貴方を手に入れる為に来た」

「私にこの罰を、侮辱と痛恨の罰を」

そしてさらに言う。

「それが私への報い……」

「では私と共にだ」

「いえ、私は」

「嫌だというのか？」

「誰も私に近付くことはできない」

こう言っただけでグンターの姿のジークフリートを拒もうとする。

「そう、誰も」

そしてだ。その左手を拳にして見せる。指輪である。

「この指輪がある限り」

「指輪が」

「この指輪が見える筈、この指輪が」

結婚の証だという。しかしであった。

ジークフリートはその指輪を見てだ。さらに言うのだった。

「私はそれも手に入れる為に来たのだ」

「何っ!？」

「ニーベルングの指輪」

その名前さえ言ってみせたのである。

「それをだ」

「何故、それでは」

「貴女と指輪を手に入れる為に」

こう言ってまた一歩前に出た。

「私はここに来たのだ」

「それでは。私は」

「さあ、今こそ」

ジークフリートの言葉に絶望するブリュンヒルテの手を取り。彼は高らかに言った。

「友への忠誠の為に」

「恐ろしい運命、何という・・・」

ブリュンヒルテは絶望するばかりだった。その彼女を引いて今彼は山を降りるのだった。

第二幕その一

第二幕 告げられた秘密

ハーゲンは自分の部屋にいた。そこは寝室であり簡素なベッドがある。その白いベッドの横にある椅子に座って瞑想をしていた。その彼のところにだ。

「ハーゲンよ」

彼の頭の中にである。アルベリヒが出て来て声をかけてきたのである。

「我が子よ、眠っているのか？」

「その声は」

「安息と眠りはわしにはない。だが御前はどうかのだ？」

「聞こえている」

「こう返すハーゲンだった。」

「だが。何の用なのだ？」

「御前に告げる為に来た」

「私にか」

「そうだ。御前は思うままに使える力を持っている」

それを言ったのである。

「それを告げる為にだ」

「そのことはもう知っているが」

「あの女はわしの為に御前という男を産んでくれた」

「母は私に勇気を授けてくれた」

ハーゲンはまずこのことを話した。

「しかしだ」

「しかし。何だ？」

「あんたは私に何を授けてくれた」

頭の中にある父に問うたのである。

「何をだ」

「知恵を授けたが」

「悪知恵をだな」

こう言い返すハーゲンだった。

「そんなものは有り難いとは思わぬ」

「またそんなことを言うのか」

「あんたはただ自分の精を母の中に入れてただだ」

「愛なぞなくとも子はできる」

アルベリヒはせせら笑うようにして述べてきた。

「女を抱けないわしでもな」

「そんな風にして生まれて嬉しいものか」

ハーゲンは忌々しげに告げた。

「ただ生まれただけなのだからな」

「その憎しみこそがいいのだ」

アルベリヒは我が子のその憎しみをかえって喜んでいた。

「そして陽気な奴等をだ」

「この世もか」

「わしは楽しみを知らず苦痛を背負っている」

それが彼なのだというのだ。

「そのわしを御前は愛する」

「そのつもりはない」

「だがそれは義務だ」

また我が子に言い返す。

「力が強く大胆で賢くもあるな」

「それが何の役に立つのだ」

「わしの役に立つ」

あくまで彼本意である。

「わしは今ニーベルングの軍勢を編成している」

「小人達の軍が何の役に立つ」

「神々を滅ぼす」

そうするというのである。

「これからヴァルハラに登ってだ」

「そして神々になるのだな」

「そうだ。神にだ」

それが彼の野心であった。

「かつてわしから指輪を奪ったあの憎むべきヴォータンはだ」

「最早力はないな」

「己の血を引いたヴェルズングのジークフリートに敗れた」

「そして力を失った」

「奴と光の精達に残っているのは破滅だけ」

そして言った。

「神々の黄昏だけだ」

「そしてあんたが新たな神になる」

「わしが全てを支配するのだ」

そのどす黒い笑みと共に語る。

「そして御前もだ」

「私もか」

「そうだ。わしの後には御前だ」

まるで悪事を囁く様な言葉である。

「御前なのだよ」

「私が神になるのだな」

「御前の忠誠がいかかわしいものでなければだ」

アルベリヒも馬鹿ではない。このことはもう察していた。

第二幕その二

「わしは既に動いていた」

「既にか」

「ジークフリートは大蛇を倒し指輪を手に入れ」

「今度はこのことを話したのである。」

「そしてヴォータンを倒しあらゆる力を手に入れた」

「そうだな」

「あの愚か者は自覚はしていないが」

「これは彼等にとっては幸いであつた。」

「ヴァルハラもニーベルングも逆らえぬ」

「指輪の力によつて」

「わしでさえもだ」

「当然ニーベルングの王であるアルベリヒもであつた。」

「あの恐れを知らぬ勇士の前ではだ」

「しかしあの男はだ」

「指輪の価値を知らずその魔力も使わない」

「やはり彼は指輪を知らなかつた。」

「ただ愛だけを見て幸福だけを求めている」

「その通りだな」

「その愚か者を倒すのが御前だ」

「それは安心するのだ」

「父の問いに静かに述べたハーゲンだつた。」

「既に私の手の中にある」

「もう来ているのだな」

「既にギービヒの為に動いている」

「では指輪を手に入れる」

「アルベリヒの今の言葉は命令だつた。」

「よいな」

「そうしろというのか」
「あのラインの乙女共やローゲはだ」
「彼等のことを話すにあたっては実に忌々しげである。」
「あ奴に入れ知恵をして指輪を元に戻そうとするかも知れぬ」
「そうなれば私は神にはなれない」
「わしもじゃ。あの愚か者は権力にも富にも興味はない」
「見ているのは愛だけだ」
「愛なぞ何にもならぬ」
「既にそれを捨てているアルベリヒだからこそその言葉である。」
「何一つとしてだ。役に立つのは権力と富だけだ」
「その通りだな」
「だからだ。早くだ」
「またハーゲンに命じるのだった。」
「あの指輪を手に入れる。その為の御前なのだからな」
「私の役目というのだな」
「御前もまた恐れを知らぬ」
「ハーゲンもまたなのだ。」
「その御前に命じるのだ。それではだ」
「それでは。何だ？今度は」
「このことを誓うか」
「指輪を手に入れることをか」
「そうだ。誓うのかどうなのだ？」
「私は私の為に指輪を手に入れる」
「父のことは考えていなかった。あくまで自分が神になろうというのである。」
「私に誓う。心配は無用だ」
「ふむ、まあいい」
「その誓いは自分に対するものではないので不満だったが頷くことになったアルベリヒだった。そしてそのうえでまた言うのであった。」
「では指輪をだ」

「わかった」

こうしたやり取りをするのだった。これで話は終わった。そして朝になるとだ。ジークフリートが宮殿に帰って来たのである。

彼はすぐにハーゲンを呼んだ。

「ハーゲン、起きているか？」

宮殿の庭で彼を呼ぶ。そのあまりにも広い庭の中でだ。周りは黄金色の宮殿に囲まれている。その庭も緑の芝生に青い水と美しいものである。

「起きているのか？」

「何だ？」

ハーゲンは彼を待っていた。しかしそれを隠して今起きた顔で彼の前に出た。そしてそのうえで起きたばかりの表情を作って彼に問うたのである。

「ジークフリートか」

「そうだ、私だ」

既に彼自身の姿に戻っていた。

「今戻ったところだ」

「そうか、早いな」

今度は親しげな顔を作ったの言葉である。

第二幕その三

「あの岩屋からもうか」

「そうだ。それでグンター達は後から来る」

「二人というのだ」

「ブリュンヒルテもいる」

「ここで彼は勝ち誇った様な顔になるのだった。

既にだ。安心してくれ」

「そうか。それは何よりだ」

それを聞いて安心した顔を見せるハーゲンだった。

「よくやってくれた」

「そしてグートルーネは？」

「あれは朝が早い」

妹のことはそのまま述べたのである。

「もう起きている時間だ」

「そうか。それは好都合だな」

「グートルーネ」

早速彼女を呼ぶハーゲンだった。

「庭に来るのだ。ジークフリートが帰って来た」

「私はここにいる」

ジークフリートも言う。

「ここだにだ」

「躊躇わずに迎えに来るのだ」

「ギービヒの姫よ」

ジークフリートの言葉は朗らかである。

「さあ、どうかここに」

「まさかもう帰って来られたなんて」

そのグートルーネが出て来た。彼女は素直にその早い帰還に驚いていた。

「何という方なのかしら」

「今日は」

ジークフリートはその彼女にこれ以上はないまでに明るく笑顔を向けて告げた。

「貴女を妻にする為にここに」

「では兄上もまた」

「その通りだ」

朗らかにそのことも告げるのだった。

「既に彼の傍に」

「兄上は炎に燃やされなかったのですね」

「私がその代わりになって進んだのだ」

このことをここでも話すのだった。

「それによってなのだ」

「炎は怖くないのですか？」

「燃え立つ炎は私を喜ばせるだけだ」

「何と」

このことはグートルーネにとっては驚く他ないことだった。

「炎ですらもですか」

「そう。私は恐れを知らないのだから」

「彼は真の勇士だ」

ハーゲンもグートルーネに親しげに言ってみせた。

「だから案ずることはないのだ」

「炎ですらも貴方を」

「恐れはしない」

「しかしそのブリュンヒルテという方は貴方を兄上と思ったのですね？」

「ハーゲンに教えてもらった通りだった」

ジークフリートはここでハーゲンを見て語った。

「隠れ兜の力を使って貴女の兄上の姿になったのだから」

「私はいい忠告をした」

「全くだ」

「そしてその人は兄上と共に」

「今下っている。結婚はしていないのでお互い離れてはいるが」

「ここでこう言うのだった。」

「グンターは生真面目だ。結婚しないと肌を触れないというのだから」

「あれはそういう男なのだ」

「ハーゲンも言うのだった。」

「だから今まで一人だったのだ」

「そうだな。実は私にしても」

「貴方もですか」

「その証にまだ貴女に触れてはいない」

「グートルーネを見たうえで微笑んだ言葉だった。」

「それが何よりの証ではないか」

「そうですね。確かに」

ジークフリートは嘘を言っていない。このことはグートルーネにもわかった。それで彼女も納得した顔で彼の説明に頷いたのであった。

そうしてだ。グートルーネは二人に言うのであった。明るい笑顔で。

「それでなのですが」

「それで？」

「そうです。兄上がもう戻られます」

その話をするのである。

第二幕その四

「ですから婚礼の式の準備を」

「そうだな」

ハーゲンは今の彼女の言葉に頷いた。

「それではすぐにだな」

「ハーゲン、家の者達を」

「ここに集めるのだな」

「私は女達を集めます」

彼女はそうするという。

「すぐにそうしますので」

「わかった」

彼女のその言葉に頷くハーゲンだった。

「ではすぐにだな」

「はい、では私はこれで」

「私も人を呼ぶのに協力しよう」

ジークフリートは二人の手伝いをすると申し出た。

「では角笛を吹こうか」

「いや、それはいい」

「貴方は旅から戻られたばかりですから」

しかしそれは二人によって止められてしまった。

「休むといい」

「どうかそうして下さい」

「休めというのか」

「今帰って来たばかりですから」

グートルーネは優しく彼に告げた。

「ですから」

「そうか、そう言うのならだ」

ジークフリートもそれに頷いた。そうしてだった。

「では私は休ませてもらおう」

「そうして下さい。ではハーゲン」

「うむ」

話は二人のものになっていた。

「私はこれで」

「ここは私が引き受けよう」

「それでは」

こうしてジークフリートは休みに入りグートルーネは女達を呼びに向かった。ハーゲンは彼等がそれぞれの場所に向かったのを見届けてから角笛を吹いた。それは高らかに宮殿全体に鳴り響いた。

それを鳴らしてからだ。彼はさらに言うのであった。

「ホイホー！ホイホー！ホホー、ホー……！」

まずは高らかに叫ぶ。

「ギービヒの者達集え！武器を手に集え！」

こう叫んで家の者達を呼ぶのである。

「全ての武器を！鋭い武器を！今は危急の時ぞ！」

「角笛が鳴っただと!？」

「軍を集めるのか」

「それではだ」

「今こそここに！」

その声に応じて四方八方から黒い軍服の男達が出て来た。ブーツも黒である。そしてその手にはそれぞれ槍や剣、斧といったものを手にしている。

その彼等がだ。庭の中央にいるハーゲんに問うのだった。

「危機とは何だ？」

「戦いか？」

「グンター様の身が危ないのか？」

「何故武器が必要か！」

言いながら集まるのだった。

「ハーゲン！」

「ホイホイ……！」

彼等もまた叫ぶ。

「ホホイ……！ホ……！」

「武器を固め休むことをするな」

ハーゲンは己の周りに集う彼等に告げる。

「グンターを迎えるのだ」

「グンター様を」

「御無事なのだな」

「そう、彼は無事だ」

そのことは保障する。

「妻を迎えるのだ」

「妻をか」

「あの方が」

「そうだ」

まさにその通りだという。

「恐れを知らぬ妻をだ」

「何と」

「あの方もいよいよ」

「それではだ」

彼等はハーゲンにさらに問うた。

第二幕その五

「何故我等はここに集つ」

「ここで何をすゝるのだ」

「何をすればいいのだ」

「まずは強い雄牛を屠る」

最初にそれをせよというのだ。

「ヴォータンの為にだ」

「我等の神の為に」

「その為に」

「そしてその血をヴォータンの聖なる石に注ぐのだ」

全てはヴォータンへの祝福の為であつた。

「そしてだ」

「そして」

「次は」

「ドンナーの為にたくましい雄山羊を屠る」

彼の神獣である。

「そしてフローの為にはだ」

「猪だな」

「それをだな」

「そうだ」

家臣達の問いに答える。

「そしてフリツカには羊をだ」

「フライアには林檎を」

「ワルクユーレには鳥を」

彼等は既にそこまでわかつていた。全ては婚礼に祝われ食べられるものだ。

そしてである。彼等はさらに言った。

「そして火を灯そう」

「ローゲの為に」
「角の杯を手に取り」
「ハーゲンの言葉は続く。」
「女達から酒を受けるのだ」
「酒を」
「祝いの酒をだな」
「蜜酒も葡萄酒もだ」
「どちらもだという。そしてである。」
「麦酒も出すのだ」
「全ての酒をだな」
「それを」
「そう、出すのだ」
「まさにそうせよという。」
「そしてすっかり酔いの回るまで飲むのだ」
「おお、それならだ」
「望むところだ」
「誰もがハーゲンの今の言葉には応える。」
「どれだけでも飲んでみせよう」
「そしてグンター様を祝おう」
「是非共だ」
「そうしてみせよう」
「飲み歌うのだ」
「ハーゲンの言葉はさらに続く。」
「幸福な結婚であるように」
「その為に」
「我等が」
「そうだ。神々を祭るのだ」
「ここではハーゲンの言葉は空虚になったが気付く者はいなかった。」
「そうするのだ。いいな」
「わかった」

「我等の祝いの声を響かせてみせよう」

「このライン全体にだ」

彼等もハーゲンの言葉に応え高らかに言う。

「我等の声を響かせよう」

「しかしだ」

「そうだな」

そしてここでもう言うのであった。

「あの気難しいハーゲンがここまでではしゃぐとは」

「それだけ嬉しいのか」

「ハーゲルドンも刺すことはないな」

さんざしのことである。それを刺すこともないのだという。

「もうな」

「それもないな」

「婚礼の披露役か」

「あのハーゲンが」

「では強き者達よ」

ハーゲンはまた彼等に告げた。

「彼等を出迎えよう」

「そうだな」

「今ここでだ」

彼等も満面の笑顔で応えてそれぞれ言う。

第二幕その六

「グンター様と奥方をだ」

「その方にもお仕えする為に」

「是非共だ」

「その方に災いが生じたならばだ」

これはハーゲンの策略だった。誰も気付いてはいないが。

「復讐を躊躇うな！」

「無論だ！」

「我等全員今それを誓おう！」

「ここぞだ！」

彼等は勇ましく口々に誓う。その手の武器を高々に掲げて。

「グンター様万歳！」

「ギービヒ家に繁栄と栄光あれ！」

その言葉と共に今グンターが戻って来た。その後ろにはブリュンヒルテがいる。彼の顔は朗らかだが花嫁の顔は蒼ざめている。しかし今はハーゲン以外はそのことに気付いてはいない。ハーゲンもまたそれを言うつもりは今全くないのであった。

そしてである。グンターは晴れやかに自分の家臣達に告げるのだ。つた。

「愛する者達よ」

「はい、グンター様」

「ようこそ戻られました」

「今日は妻を連れてきた」

自分でもこのことを話すのだった。

「ブリュンヒルテという。これだけ気高い女は今までいなかった」

「それだけの方を」

「妻に迎えられるのですね」

「神々は我が一族に恵みを下された」

ブリュンヒルテを見ながらの言葉である。

「それを祝ってもらいたい」

「無論です、それは」

そして誰もが笑顔で応えた。

「我等が主グンター様の為に」

「喜んで」

「そしてだ」

さらに言う彼だった。

「私だけではなく妹もまた」

「グートルーネ様もですか」

「結婚されるのですか」

「そうだ」

それもその通りだというのだった。

「あれもまただ」

「どなたと結婚されるのですか？」

「それで」

「ジークフリートという」

グンターは周りの家臣達にその名を告げた。

「彼が妹の夫となるのだ」

「二組の夫婦が今誕生する」

「このギービヒの家に」

ハーゲン以外の全ての者が素直に喜んでいる。

「何という喜びか」

「まさに神の恩恵に他ならない」

「これ以上の恵みはないぞ」

「しかしだ」

ここでようやく家臣の中の一人が気付いたのだった。

「花嫁の方は」

「そつえば」

「確かに」

そして一人が気付くと次々にであった。

「夢見心地というのか」

「心はここにはないのか」

「そう見えるな」

「何故だ？」

そしてであった。家臣達の前に出て来ていたジークフリートも言うのだった。その顔は怪訝な顔をしての言葉だった。

「ブリュンヒルテは私を見ているのは何故だ？」

「何故」

ブリュンヒルテは啞然とした顔でジークフリートを見て言った。

「何故ジークフリートがここに」

「私はグンターの優しい妹と結ばれる」

ジークフリートは知っていることを言うだけだった。今の彼をだ。

「貴女がグンターと結ばれるように」

「私がグンターと!？」

ブリュンヒルテはそれを聞いてさらに狼狽を見せた。

「まさか。そんな」

「いや、それはもう御存知の筈」

「ジークフリート」

そして切羽詰った顔で彼の名を呼んできた。

「私を知らないのですか？」

「何を言っているのかわからない」

今のジークフリートにはであった。

第二幕その七

「貴女は一体」

「！？それは」

そしてであった。彼の腕を見てだ。それは。

「その指輪は」

「指輪は？」

「あの時の指輪」

彼の手にしている指輪を見ての言葉である。

「あの時グンターがしていた」

「一体どうしたのだ？」

「二人共何を話しているんだ？」

家臣達はそんな彼等のやり取りを見て怪訝な顔になっていた。

「お知り合いなのか？」

「どうなのかな」

「諸君」

そしてであった。ここでハーゲンが彼等に告げるのだった。

「奥方の言葉をよく聞いておくのだ」

「奥方の」

「それを」

「そうだ」

まさにそうだというのである。

「それをだ。いいな」

「わかった。それではだ」

「そうしよう」

とりあえず頷く彼等だった。そのうえでその様子を見守るのだった。

ブリュンヒルテはだ。さらに言うのだった。

「私は貴方の指輪を見ました」

「私の？」

「そう、貴方の」

それを見たというのである。

「それは貴方のものではなく」

「私のものではなく」

「この人のものです」

今度はグンターに顔を向けるのだった。

「この人が私から奪ったのです」

「私からだと!？」

「そうです」

まさにそうだというのである。

「貴方は何故それをこの人から受け取ったのです？」

「この指輪はグンターから受け取ったのではない」

このことはありのまま話すのだった。

「それはだ」

「しかしその指輪は」

その指輪こそだった。あのニーベルングの指輪なのだ。それはブ

リユンヒルテからジークフリートが奪ったものである。

「その為に私は貴方と結婚することになった」

またグンターを見て言うのだった。

「それなら貴方の権利をはっきりさせ証拠の品を返してもらおうので

す」

「指輪を？」

しかしグンターも戸惑う顔で言うのだった。

「私は彼に指輪をあげてはいない」

「あげてはない？」

「そうだ。しかし」

彼もまたブリユンヒルテに対して問うのだった。

「貴女はその指輪を御存知なのか」

「貴方が私から奪ったあの指輪を」

指輪の話になっていた。

「何処へ隠したというのか。そう」

「また私なのか」

「そうです」

また顔を向けられて声をあげたジークフリートに告げるのだった。

「ジークフリート、陰険な盗人よ」

「この指輪はだ」

しかしジークフリートも言うのだった。

「女の手から私に渡ったものではない」

「では何だというのですか？」

「私がこれを奪い取ったのは女からではない」

そして次に過去のことを話しはじめた。

「これは戦いの報酬だ」

「戦いのだというのですか」

「そう、私自身のことだから知っている」

こう言うのである。

「かつて私が欲望の洞穴で大蛇を倒した時の報酬だ」

「ブリュンヒルテ」

ここでハーゲンがそのブリュンヒルテのところに来て問うてきた。

「貴女はその指輪をよく知っているのか」

「貴方は」

「ハーゲンという」

問われてここで名乗るのだった。

「ギービヒ家の家臣だ」

「そうなのですか」

「それはだ」

ここでさらにブリュンヒルテに問うのだった。

第二幕その八

「グンターに与えたものならばだ」

「それならば」

「それは彼のものだ」

理屈を言ってみせたのである。

「そしてジークフリートは姦計によってそれを手に入れたことになる」

「それによって」

「そうだ。信義を破ることは罪だ」

「そう、私は騙された」

顔を真つ青にさせての言葉である。

「恥ずべき欺瞞、恐ろしい裏切り？」

「裏切り？」

その言葉に最初に反応したのはグートルーネだった。

「誰が裏切られたというの？」

「何か話がおかしくなったぞ」

「そうね」

「これは」

家臣達も女達も今の言葉に眉を顰めさせて話をする。

「どういうことなの？」

「それで」

「神聖な神々、ヴァルハラの支配者達よ」

ブリュンヒルテは嘆き悲しく声でその天を見上げて言うのだった。

「貴方達の私への報いはこれだったのですか。これだけの悩みと屈辱を与えることが」

まさにそれだというのである。

「そして私にさらに恐ろしい復讐を。誰も抑えられないような激しい憤りをこの胸に沸かせてそのうえでこの心を引き裂くのですか。」

それなら」

震える身体でだ。わなわなと言ったのだった。

「私を偽った男も打ち砕くがいい」

「ブリュンヒルテ、我が妻よ」

グンターが慌ててその彼女に告げる。

「落ち着くのだ、今は」

「離れるのです、裏切られた人よ」

「私もまた裏切られたというのか」

「そう、自ら裏切られた人よ」

こう彼に告げるのである。

「聞くのです」

「何だ？」

「今度は一体」

「私はこの人と結婚したのではなく」

一旦グンターに顔を向けてからであった。

「この人と結婚したのです！」

「ジークフリートとだと!？」

「グートルーネ様の夫と」

「まさか」

誰もが、ハーゲン以外の全ての者がそれを聞いて啞然となった。

「そんなことが」

「有り得るのか」

「この人は私から喜びも愛も奪ったのです」

こう告発するのである。

「全てをです」

「私は貴女がわからない」

ジークフリートはまさに狐につままれた顔になっていた。

「自らの名誉をそこまで傷つけられるとは」

「まだ嘘を言うの?」

「私は嘘は言っていない」

少なくともジークフリートには自覚のないことであつた。

「その言葉が作り事だというのを私が言わないといけないのですか？」

「そうです」

「私が信義を破つたかどうか聞くといい」

彼にしてもこう言うしかなかった。

「私はグンターと兄弟の誓いをしてそれを私の剣ノートウングが守つてくれたのだ」

「だから何だというのです？」

「剣の名誉にかけて言つ」

これが彼の言葉だつた。

「絶対にだ」

「そんなものを引き合いに出しても」

しかしブリュンヒルテも言うのだつた。

「そんなものは何の役にも立ちはしない」

「無駄だというのが」

「そうです」

まさにその通りだというのだ。

「その剣は鞘まで知っている」

「では余計に」

「剣の持ち主が恋慕の女に言い寄つた時にはその忠実な友人ノートウングは気楽に鞘に収まって壁にかかつていただけなのです」

「ジークフリート」

グンターは強張つた顔でジークフリートに問つてきた。

「君が彼女の言葉に弁明できなければ」

「その時は？」

「君は私の名譽を汚したことになる」

そのことを言うのであつた。

第二幕その九

「その時はだ」

「そうです」

そしてグートルーネも蒼白になって言うのだった。

「ブリュンヒルテの言葉は一体」

「そうだ、潔白ならだ」

「是非訴えを言い伏せて」

「そのうえで誓いを」

「わかっている」

ジークフリートもそれを言うのだった。

「その訴えを言い伏せてそのうえで誓いも立てよう」

「その言葉偽りはないのですね」

「それは」

「ない」

はつきりと言うジークフリートだった。

「だからこそ誓おう」

「そうなのか」

「それでは」

「貴方達の中で」

ギービヒの家臣達を見回しての言葉である。

「私と共に武器を持って誓う人はいるか」

「それではだ」

ここで出て来たのはハーゲンだった。

「私の槍でいいか」

「ハーゲン、貴方がか」

「そうだ、それでいいか」

こう言ってきたのである。

「私の槍で」

「わかった、それではだ」
ジークフリートもそれを聞いて言うのだった。
「煌く槍よ、我が永遠の誓いを守るのだ」
「うむ」
「槍の穂先にかけて誓おう。私が傷を受けるとすれば」
その時はというのである。
「私を斬るのは御前なのだ」
「我が槍が」
「そうだ」
そしてさらに言う。
「彼女の訴えが真実で私が兄弟の誓いを破ったならば」
「そうです」
ブリュンヒルテもここで言うのだった。
「煌く槍よ、聖なる武器よ」
「貴女も誓われるのか」
「誓います」
彼女も言うのだった。
「この槍の穂先にかけて。その神聖な力で彼を裁くのです」
「その言葉偽りではなく」
「そう、偽りではない」
「まっないそうだというのである。」
「彼は誓いを全て破った。全て偽ったのだ」
「雷神ドンナーよ」
「その雷でこの汚辱を晴らして下さい」
「どうか」
「家臣達も女達も言う。」
「この恐ろしい場を」
「その雷で」
「グンターよ」
「何だというのだ？」

「貴方の妻を鎮めてくれ」
そうしてくれと言うのだった。彼に顔を向けてだ。
「この荒々しい岩屋の女を休ませ落ち着かせてだ」
「そうしてくれというのか」
「そうだ。悪霊が我々を怒らせようと企んでいる」
彼にしてはそうとしか思えないものだった。
「誰もに帰ってもあつてだ。私には全く訳がわからない」
「その言葉真実なのだな」
「私は嘘は言わない」
「少なくとも言っているつもりはなかった。」
「誓った通りだ」
「そうなのか」
「隠れ兜を使ったというのにだ」
「ここでは小声になつて囁くのだった。」
「彼女を騙すことには失敗した。それは残念だった」
「そうだな。それは」
「その通りだ」
はつきりと言うジークフリートだった。

第二幕その十

「だが女の立腹はすぐに収まる」

「果たしてそうなるか」

「そうなる」

それは間違いないというのである。

「だからだ。すぐに貴方のよき妻になるだろう」

「わかった」

グンターも一応頷きはした。

「それではだ」

「では諸君」

ジークフリートは家臣や女達に対して顔を向けて告げた。

「宴の場に」

「宴に」

「その場に」

「そう、楽しくやりましょう」

この場を取り繕う為の言葉であるのは言つまでもなかつた。しかしそれでもあえてここでは言つのであつた。彼にしても必死である。

「それでは」

「そうですね。何はともあれ」

「楽しく」

彼等もそれには納得するのだった。

「やりましょう」

「それでは」

「そういうことで」

こうして彼等もジークフリートに頷いてだつた。そのうえで彼と共に宴の場に向かう。しかしグンター達はそこに残つた。

ブリュンヒルテとハーゲンもいる。グートルーネはいない。三人では暗視をするのだった。

「どういうことなのか」

ブリュンヒルテが最初に言った。俯き暗い顔でだ。

「何故この様なことに。こうなってしまうては何もできない。私は彼に全ての知識を授けたというのに」

そのことも言った。

「彼はその力であの娘を手に入れ」

グートルーネのことである。

「そして恥辱に嘆く私を絆で縛り上げ獲物とみなして笑顔で人に与えるとは。この絆を断ち切る剣を誰が私に与えてくれるのか」

「ブリュンヒルテ」

ハーゲンがその彼女に近付いて言ってきた。

「私を信じるのだ」

「貴方を」

「そうだ。私が行おう」

こう彼女に言ってきたのである。

「貴方を裏切ったその男にだ」

「しかしそれは」

「それは？」

「誰にもできはしない」

首を横に振つての言葉であった。

「彼は誰よりも強いのだから」

「だが」

ハーゲンも怯まずに言う。

「彼の偽善を我が槍が許しはしない」

「そつだというのですか」

「誓いは無駄な気遣いでしかなくて」

しかしブリュンヒルテの返答は冷たい。

「彼を裁くには貴方の助太刀の槍よりもずっと強いものでなければならぬ」

「彼のことは私も知っている」

それを知らないハーゲンではなかった。

「ではどうしたら彼を裁けるのか」

「私は彼に力を与えました」

「力を」

「そう、その力で彼は決して傷を受けないようになった」

「魔力でか」

「そう、古の魔力で」

それはブリュンヒルテがワルキューレだからこそ知っていることであつた。

「それによつてです」

「ではどんな武器も傷つけられないというのか」

「そうです」

その通りだというのである。

「その通りです」

「ではそれは不可能なのか」

「いえ」

しかしであつた。ここでまた言うブリュンヒルテだつた。

「背中ならば」

「背中ならばか」

「彼は敵に決して背を見せはしない」

恐れを知らぬ彼だからである。

第二幕その十一

「だから私は彼の背中には力を授けなかったのです」

「ではそこに私の槍を」

「そう、そうすればです」

「わかった。それではだ」

ハーゲンはここまで聞いて頷くのだった。

「わかった」

「それでは」

「グンターよ」

ハーゲンはブリュンヒルテの話が終わるとうなだれたままだった。グンターに対して声をかけるのだった。

「貴方はどうなのだ」

「私はどうすればいいのだ」

「貴方は恥を受けた」

このことを言う彼だった。

「それは私も否定しない」

「貴方はどうするのですか」

ブリュンヒルテは彼を責めてきた。

「ハーゲンは向かおうとしています。しかし貴方は」

「私は人を欺き欺かれた」

あの策略のことも話していた。自然に出てしまった言葉である。

「裏切り裏切られた。この汚された名誉をどうするべきか」

「その名誉を取り戻すにはだ」

ハーゲンは今度はグンターの傍に来て言うのだった。その重厚な声で。

「死だけだ」

「死か」

「そう、ジークフリートの死だ」

まさにそれだというのである。

「それが貴方の名誉を守るのだ」

「それがか」

「それしかない」

他の選択肢は出さないのだった。

「だからこそだ」

「しかし」

だがここで。グンターは狼狽を見せるのだった。

そしてだ。そのうえで言うのであった。

「我々は互いの血を飲み兄弟の誓いをした」

「その誓いが破られた時はだ」

さらに言うハーゲンだった。グンターのその言葉に返してだ。

「血で償わなければならぬからだ」

「彼が誓いを破ったからこそ」

「その通りだ」

「だからこそです」

ブリュンヒルテはまたグンターに言ってきた。ここでハーゲンは二人に杯に入っている葡萄酒を出すのだった。二人にとってその葡萄酒はやけに赤く見えるものだった。

その酒を受け取ってから。ブリュンヒルテはさらに言うのだった。

「彼は貴方を裏切った」

「兄弟の誓いをした私を」

「そして貴方達全てが私を裏切った」

「彼等も責めるのだった。」

「私の為に全ての血が流れても貴方達の罪は償えない」

「そうだというのか」

「そうだ。ただ一人の死だけは全ての命に代えられない」

こう話していく。

「ジークフリートはその罪の為に償わなければならないのです」

「彼は死ぬ」

ハーゲンはまたグンターに言ってきた。

「貴方の幸せの為に」

「幸せの」

「その為に」

「名誉の為だけではないのだな」

幸せという言葉に対して問うたグンターだった。

「ということは」

「あの指輪だ」

ここでまたその指輪のことを話すのだ。

「それを手に入れればだ」

「その時はか」

「そうだ。ありとあらゆる力が貴方のものとなる」

「私のものに」

「その為にはだ」

そしてさらに言うのであった。

第二幕その十二

「その力を手に入れる為には」

「彼の死が」

「そういうことだ」

「それでは」

だが、であった。グンターはそれでも言うのであった。迷う顔で。今度は彼女の名前を出した。

「グートルーネ」

「あの娘がどうしたのだ？」

「我々は彼を彼女に与えた」

このことを言うのである。

「夫を殺すということとはだ、彼女の」

「それはそうだがな」

「止めておくべきか」

「いや、行すべきだ」

これは引かないというハーゲンだった。

「絶対にだ」

「そうなのか」

「彼を迷わしたのは」

そしてブリュンヒルテは言った。

「彼女のあの美貌。なら彼女にも報いが」

「明日我等はだ」

ハーゲンはさらにグンターに囁いた。

「狩に向かおう」

「狩にか」

「そうだ、狩にだ」

まさにそれだというのである。

「仮に出てそして彼を裁き」

「それをどう言い繕うのだ？」

「猪が彼を殺した」

理由はそれだという。

「そうすればいいだけだ」

「そうしろというのか」

「そうだ、それならどうだ」

「そうだな」

グンターは虚ろな調子で頷いた。

「ではそれでだな」

「そうするといい。ではだ」

ハーゲンも杯を手にしていった。三人で飲む。だがここでグンターとブリュンヒルテは杯からの酒で手を赤く塗らしてしまった。不気味な赤だった。

「罪には報いを」

「偽りの忠誠には裁きを」

グンターとブリュンヒルテはそれぞれ言う。

「その為に神々よ」

「今御照覧を」

（指輪は我がものとなる）

ハーゲンは心の中で呟いていた。

（アルプの王よ、我が父よ）

アルベリヒのことも思うのだった。

（見ているのだ、明日全てが決まるのだ）

ハーゲンだけはわかっていった。全てが。そしてそのうえで空を見上げた。今そこには闇夜に隠れてニーベルングの軍勢がヴァルハラを目指さんとしていた。

第三幕その一

第二幕 終焉

河に彼女達がいた。あの乙女達である。

「かつては暗い河の底も明るかった」

「そう、あの黄金によって」

「けれど今は」

「暗いまま」

こつと嘆いているのだつた。

「深みにあるあの星はもう」

「私達の元にはない」

そうして。

「ヴァイアラーラーラー」

「ヴァイアラーラーラー」

「ライアー」

彼女達の叫び声も出す。

「どうか私達に再びあの指輪を」

「あの黄金を」

「どうか私達に」

「ジークフリート」

この名前も出て来た。

「彼をここに」

「そして指輪を戻してくれるのなら」

「私たちはそれで望みはありません」

「他には」

「あれは」

ここでヴォークリンデが言った。来た。

「角笛の音が」

「そうね、あれは」

「間違いない」

「ジークフリートの」

それだと言うヴオークリンデだった。

「あれこそは」

「そうね」

ヴェルグンデも言う。

「あの勇士の」

「間違いないわ」

「あれは」

「彼と話がしたいわ」

フロースヒルデも言った。

「どうすればいいのか」

「まずいな」

ここでそのジークフリートが述べるのだった。

「アルプに惑わされ獲物の行方を見失ったぞ」

「来たわね、ここに」

「そうね」

「好都合だわ」

「何処にいるのか」

彼はラインの乙女達に気付かないまま河のところに来た。乙女達

はその彼に対してすぐに声をかけたのである。

「ジークフリート」

「どうかここに」

「ここに来て」

「んっ!？」

ジークフリートもその声を受けて顔を河に向ける。するとだった。

そこに乙女達がいた。河から顔を出して彼を見てきているのだっ

た。手さえ振って愛想をよくしている感じである。

「何を探しているの？」

「見たところ弓を持っているけれど」

「狩りで獲物をかしら」

「ああ、そうだ」

その光り輝く弓を手にして述べるジークフリートだった。

「それでなんだが」

「それで獣なのね」

「彼を探してなのね」

「そういうことなの」

「君達は知らないかい？」

こつこつ女達に問うのだった。

「一匹の熊を。君達の友人ならその獣は追わないが」

「一つ聞いていいかしら」

ヴォークリンデがその彼に言ってきた。

「そのことを」

「そのこととは？」

「その獣を貴方にあげたら御礼はあるかしら」

「御礼か」

「ええ、それは？」

「私は今はまだ獣を一匹も獲っていない」

こつ返すジークフリートだった。

「それで何も持っていないのだが」

「その手の指輪は」

ヴェルグンデはそれを指し示してきた。

「どうかしら」

「指輪を？」

「そう、それは」

「どうかしら」

「これはだ」

しかしだった。ジークフリートは乙女達の言葉にまずは眉をしかめさせた。そうしてそのうえで答えるのだった。

第三幕その二

「大蛇まで倒したものだか」

「大蛇を」

「それは知ってるわ」

「あの巨人が姿を変えた大蛇ね」

「だからだ」

また言う彼だった。

「熊一匹の代償としてはだ」

「嫌だというの？」

「それで」

「それにだ」

ジークフリートはさらに言うのだった。

「これを君達にに与えたら妻も寂しがるだろう」

「あら、奥さんが怖いの」

「そんなに」

「怖くはない」

それは否定するのだった。

「だが妻を悲しませることはしたくないからだ」

「だからだというの」

「それで」

「やっぱり惜しいのね」

乙女達はその彼にさらに言うのだった。

「それならそうと言えばいいのに」

「そうよ。わかりやすいのに」

「全く」

それぞれ言い終わると河の中に入った。ジークフリートはそれを見届けてからふと気が変わってそれで言うのだった。

「私も吝嗇ではない」

それは自分でも気をつけていることだった。

「それなら。今度出て来たら」

その指輪を渡すつもりだった。しかしであった。

乙女達は出て来ない。そうして河の中から声がするのだた。

「勇士よ、その指輪は必ず」

「貴方に災いをもたらすわ」

「だからその時は」

「私達はその呪いから貴方を救いましょう」

「勝手に言っておくことだ」

ジークフリートは呪いについては戯言と思っていた。

「折角渡そうというのに」

「ジークフリート、気をつけるのよ」

「必ず」

「いいわね」

こう言うのである。

「大きな不幸から」

「何故ならその指輪は」

「私達が護っていた黄金から作られたもの」

「ラインの黄金から」

「ラインの黄金!?!」

ジークフリートはそれを聞いて首を傾げさせた。

「それからか」

「それから恥辱の中で指輪を作った男」

「その男の呪いが」

「貴方にも」

「私にもだというのだ」

「そうだ」

まさにその通りだというのだ。

「貴方に殺された大蛇の様に」

「その通り」

「全く同じ様に」

「何かそれを聞いていると」

またジークフリートの気が変わったのだった。

「指輪を渡そうとは思えなくなったな」

「若し呪いを受けたくないのなら」

「滅びたくないのなら」

「その指輪を」

乙女達はさらに話していく。

「ライン河へ」

「私達の河の中へ」

「その指輪を」

「私に脅しは効かない」

恐れを知らないジークフリートだからこそその言葉だった。

「そんなものはだ」

「これは本当のことよ」

「呪いのことは」

「私達は今は嘘を言っていないわ」

河の中からまた話すのだった。

第三幕その三

「だから指輪を」

「それを」

「私の剣はあらゆるものを断ち切る」

だがジークフリートはその河の中の彼女達に告げるのだった。

「どんな呪いであってもノルンの糸も」

「運命もまた」

「断ち切るというのね」

「その剣で」

「そうだ」

まさしくその通りだというのである。

「このノートウングでだ」

「その剣で」

「全てを」

「かつてあの大蛇も私にそのことを告げた」

そのことを忘れたことはなかった。彼にしてもだ。

「この指輪を手に入れれば世界も手に入れられるという」

「それも知っているのなら」

「どうしてまだ」

「手放さないというの？」

「恋の喜びさえあればいい」

それこそがジークフリートの望むものであるのだ。

「私は貴女達にこれを返してもよかった」

「それなら是非すぐに」

「今その指輪を」

「私達に」

「私は脅しは嫌いだ」

これはジークフリートの心だった。彼はそれを嫌っているのであ

る。

「そんなことを言うのなら私は返しはしない」

「愚かなこと」

「それで貴方も」

「破滅するというのね」

乙女達はここで遂に彼を諦めた。

「わかっているようでわかっていない」

「何もかも」

「誓いさえも」

「誓い？馬鹿な」

ジークフリートはその言葉には眉を顰めさせた。

「私は誓いは破らない」

「誓いをしながらそれを守らない」

「神秘の文字を知りながら解こうとしない」

「何もわかってはいない」

こう言っていく乙女達だった。

「いと高き宝を持ちながら」

「それを捨てたのに気付かない」

「呪いは真実だというのに」

そしてさらに言ってきた。

「さようならジークフリート」

「今日のうちにも全てが終わる」

「貴方だけでなく」

「私ではなく」

ジークフリートにはさらにわからないことだった。

「誰が滅ぶというのか」

「彼女がその指輪を受け継ぎ」

「そして私達のところ」

「いよいよ」

こう言っていくのだった。そうして。

「ヴァイアラーラー……」

「ヴァイアラーラー……」

「ライアー……」

またその声をあげて河の底に消えていく。そうしてだった。ジークフリートは一人になった。そのうえで河から顔を離して言うのだった。

「水の中でも陸の上でも女達は同じなのか」

あのブリュンヒルテのことも同時に考えるのだった。

「お世辞を信じない時は脅し文句を並べ反抗すると罵られる」

彼女達とブリュンヒルテについて同時に考えて続けていた。

「しかし」

だがここで別の女のことも考えて呟く。

「グートルーネは。彼女は裏切れない」

こう言うのだった。そうしてその場を去ろうとする。ここでハー

ゲンの声が遠くから聞こえてきたのである。

「ホイホー……！」

「ハーゲンの声だな」

「ホイホー……！」

「ホホ……！」

同時にギービヒの家臣達の声も聞こえてきたのだった。ジークフリートもそれに応えて角笛を吹いてから言うのであった。

「ここだ、私はここにいるぞ」

「そうか、そこだったのか」

「わかった」

「ここはいい場所だ」

こうやって来た彼等に告げる。ハーゲン達だけでなくグンターも共にいる。ジークフリートはその彼等に対して告げていく。

第三幕その四

「涼しく心地よい場所だ」

「そうか、それならばだ」

ハーゲンが彼のところに来て応える。彼が先頭でありその後ろにグンターと他の家臣達が来ている。

彼等はジークフリートのところまで来てだ。また言うのだった。

「ここで休むとしよう」

「そして食事を」

「まずは飲もう」

「酒を」

言いながら酒も出してきた。そうしてまずはそれを飲み一息ついたのであった。そのうえでハーゲンがジークフリートに問うてきた。

「それでだ」

「何だ？」

「貴方は何の獲物を得たのか」

そのことを彼に問うのである。

「一体何を」

「残念だが」

ジークフリートは申し訳のない顔で彼に応えるしかなかった。

「私は今日はまだ」

「獲っていないのか」

「申し訳ない」

「また何故だ？」

ハーゲンは彼にさらに問うた。

「獣より速く駆けることのできる貴方が」

「水鳥達に出会った」

乙女達をこう表現するのだった。

「そして彼女達をだ」

「捕らえようとしたのか」

「しかし彼女達の言葉を聞いて」

「そういえばだ」

グンターが彼の今の言葉を聞いてあることを言ってきた。

「君は鳥や動物の言葉がわかるのだったな」

「そうだ、わかる」

それはその通りだという。

「私はだ」

「そうだったな、それは」

「ところでだ」

ここで話を変えてきたジークフリートだった。

「いいか？」

「どうしたのだ？」

「喉が渴いたのだが」

それだというのである。

「それで水か酒を欲しいのだが」

「では酒だな」

「済まない」

こう言つてである。ハーゲンが酒を持って来るのを見届けた。彼はすぐに杯の中に入っているその葡萄酒を出してきたのであった。

「葡萄酒でいいな」

「有り難う」

こう彼に礼を述べる。

「それでは早速飲ませてもらう」

「それでだ」

ハーゲンはここで親しげに彼に声をかけるのだった。

「聞きたいことがあるのだが」

「私にか」

「そうだ。君の過去のことだ」

それをだというのだ。

「聞きたいのだが」

「そうか。それならだ」

「話してくれるか」

「喜んで」

微笑んでハーゲンに伝えてだった。そうして話しはじめた。

まずはだ。森の中のことだった。

「かつてミーメという男がいた」

「ニーベルング族のか」

「そうだ、あの一族のだ」

ここでジークフリートの顔が歪む。

「嫌な奴だった」

「そこまでか」

「小ずるい奴だった」

彼にしてみればそうだったのだ。

「けしからん下心で私を育て」

「そして？」

「どうするつもりだったのか」

「私を森の中で宝を護っている大蛇に向かわせるつもりだったのだ」

このことも話すのだった。

第三幕その五

「そのうえであらゆることを教えてくれた」

「とはいっても」

「恩には感じていないのだな」

「そうだ、感じたことなぞ一度もない」

そのことも家臣達に話した。

「大嫌いだった」

「そうか、やはりな」

「それは」

「その通りだ。感じたことなぞない」

また言うジークフリートだった。

「全くだ」

「そしてだ」

ジークフリートの言葉は続く。

「弟子は彼のできなかったことを成し遂げたのだ」

「成し遂げたのか」

「それは何なのだ？」

「砕かれた鉄の破片から剣を鍛えあげたのだ」

ここでその剣ノートウングを誇らしげに出してみせた。

「父の武器を私が鍛えなおしそのうえで私が大蛇を倒した」

「君一人でか」

「そうだ、一人でだ」

まさにそうだと話すのであった。

「あのファフナーをだ」

「一人で」

「まさに大蛇を」

「そして」

ここであった。ジークフリートの言葉の響きが変わった。

「ここからの話はよく聞いて欲しい」
「とうとうと」
「どういうことなのだ？」
「私はその大蛇の血を浴びたのだ」
「話されたのはこのことだった」
「それを浴びあまりの熱さに私の指は火傷をした」
「そこまで熱い血なのか」
「大蛇の血は」
「それを舐めるとだった」
「話はそこが最も重要なのだった」
「小鳥達にさえずりが聞こえるようになった」
「それでか」
「大蛇の血を舐めて」
「その通りだ。木の上の小鳥達がさえずっていた」
「それから話す言葉こそがだった」
「ニーベルングの宝はいよいよジークフリートのものとなると」
「そうさえずっていたのか」
「小鳥達が」
「その通りだ。そして」
「さらに話していく」
「隠れ兜が見つかればいい。最後に指輪も」
「指輪!？」
「指輪を」
「小鳥達は言っていた」
「そしてだった」
「指輪は私をこの世界の支配者にしてくれると」
「それで指輪と兜を手に入れたのだな」
「そうだ」
「まさしくその通りだとハーゲンに答える」
「そうして兜と指輪を手に入れ」

「それですか」

「その二つを」

「そしてだ」

さらに話す彼だった。

「ミーメを信じてはいけない。私の命を狙っていると」

「その言葉も真実だったのだな」

「その通りだった」

言葉に忌々しげなものが戻っていた。

「あの男は自分からそれを曝け出した。だから私は斬ったのだ」

「ミーメを」

「それによつてか」

「そして小鳥はさらに言った」

「何と」

「それで」

家臣達はその話を待ち遠しくなっていた。話をさらにせがむのだった。

「言ったのですか？」

「どつしたさえずりを」

「後は山に行くべきだと」

「山に」

「そこにですか」

「そうだ、山にだ」

まさにそこにだというのである。

第三幕その六

「炎に囲まれた中に」

「炎だと!？」

それを聞いたグンターが眉をしかめさせた。

「炎といえばまさか」

「ローゲの炎だった」

だがジークフリートはグンターのそれにもハーゲンの目が光り彼の背に密かに近付いていることにも気付いていなかった。

そうしてだった。その話をさらに聞くのだった。誰もが。

「その炎を乗り越えて」

「乗り越えて」

「そうして？」

「その中に入れば」

そうなればというのである。

「一人の乙女がいると」

「炎の中の乙女か」

それを聞くとさらに動揺するグンターだった。

「それこそはまさに」

「そう、ブリュンヒルデ」

この名前も出るのだった。

「彼女が私のものになると」

「そしてだ」

周りはこちらまで聞いて唾然となるがハーゲンは後ろから彼に問うた。当然その右手には槍が存在している。銀色の輝きを放ってだ。

「その小鳥の忠告を聞いたか」

「その通りだ」

こう答えてさらにだった。

「私はその山に向かい」

「まさか」

「そうして」

「燃え盛る炎を越えてそこで彼女に会った」

「間違いない」

「グンターはここまで聞いて確信した。」

「彼女こそは」

「その眠る美女は武装していた。しかし兜を脱がせるとだ」

その名をまた出すのだった。

「ブリュンヒルテがいた。彼女は私の接吻で目を覚ました」

「全ては事実なのか」

グンターは呆然となっていた。

「それでは」

「そうして私達は夫婦となった」

ここで木立の中から鳥が来た。二羽である。それがジークフリー

トの頭上で輪を描きそのうえで去るのだった。

ハーゲンはその鳥達を見届けてから言った。

「鳥達が告げた」

「鳥が？」

「何を」

「ヴォータンの鳥達だ」

こう家臣達に言うのである。

「私に裁きを与えよとだ！」

その言葉と共にジークフリートの背に槍を突き刺した。一瞬だっ

た。

ジークフリートはそれをかわすことができなかった。そのまま受

けてしまった。身体をのけぞらせ硬直する。

ハーゲンが槍を抜くとそこから鮮血がほとぼしり出る。誰もがそ

れを見て驚いて声をあげた。

「ハーゲン！」

「何故だ！」

「何故彼を！」

グンターは止めようとしたが間に合わなかった。全ては一瞬だった。

「本当にやったのか」

「貴方の為だ」

「こう嘯くのだった。」

「全ては」

「しかしだ」

「全ては終わった」

話はこれで終わらせた。そしてジークフリートは。

彼は動きを止めていた。だがやがて口を開いて言うのだった。

「ブリュンヒルテ」

その名前を出すのだった。

「聖なる花嫁よ。目覚めよ、瞳を開けよ」

「あの方のことを」

「また」

その死の間際の中の言葉を聞きながら皆言う。

「では本当にか」

「愛しているのか」

「誰が御前をその恐ろしいまどろみの中へやったのか」

「目覚めさせた時のことだな」

それはグンターもわかった。

第三幕その七

「その時のことか」

「グンター様」

「ここは」

「最後まで言わせてやるのだ」

家臣達は止めをといたのだが彼はそれを許さなかった。

「決してだ。いいな」

「ではこのまま」

「いいのですか」

「それが彼の望みだ」

読み取って。そうしてだった。

「だからだ。いいな」

「わかりました」

「それでは」

「私は来た」

また言う彼だった。

「そして御前をこの口付けで目覚めさせる」

言葉は続く。

「そして」

「そして？」

「今度は何と」

「新妻の為にその戒めを断ち切り御前の微笑を受け」

その時のことが彼の瞼に浮かんでいた。

「瞳よ永遠に開け、息吹は快く、そのブリュンヒルテが私に」

ここまで言って倒れ伏した。グンターはそれを見届けてからだ。

周りの者達に顔を向けて。厳かに告げた。

「いいな」

「はい」

「全ては終わりました」

「宮殿に戻る」

こうしてだった。彼等はグンターに命じられるままジークフリートを運んでいくのだった。ハーゲンは今は沈黙していた。その顔には笑みもなくただ黙っているだけであった。

ギービヒ家の宮殿の庭。そこにグートルーネが出ていた。

夜になっているその庭の中に出た彼女にだ。宮殿の女達が声をかけてきた。

「グートルーネ様」

「どうして庭に」

「何かあつたのですか？」

「胸騒ぎがするの」

だからだというのだ。その暗鬱な顔でだ。

「何か起きそうで」

「何かとは？」

「一体何が」

「あの人の身に何が」

こう言うのである。

「何かが起こったのかしら。不吉な気がするの」

「それは気のせいです」

「御気になさらずに」

侍女達はそのグートルーネを宥めるのだった。

「ですからお屋敷の中に戻られて」

「それであの方を待ちましょう」

「嫌な夢を見たし」

しかしグートルーネはまだ顔を曇らせている。

「だから」

「夢とは」

「どんな夢ですか？」

「ブリュンヒルテ様の笑い声が聞こえて」

こつ話すのだった。

「あの方がそうして火の中に」

「あの方がですか」

「火の中に」

「そうです。あの夢は一体」

「ホイホー！ホイホー！」

ここでハーゲンの声がしたのだった。

「起きろ、誰もが起きるのだ」

「あの声は」

「ハーゲン様の」

「燈火を掲げよ、明るく火を焚くのだ」

ハーゲンの声が宮殿に次第に近付いてきていた。

「狩りの獲物を運んできたぞ」

「帰って来ました」

「あの方も」

「いえ」

しかしだった。グートルーネはここでも不吉な顔のままに言うのだった。「角笛が聴こえなかったわ」

「角笛？」

「それがですか」

「そうです。それが聴こえませんでした」

そうだというのである。庭に宮殿に残っている家臣達や女達も出て来た。そのうえで帰って来た彼等を迎えるのだった。

第三幕その八

「何故なの？それは」

「それは」

「けれどあの方は」

「グートルーネよ」

ハーゲンが来た。そのうえで彼女に告げるのだった。

「ジークフリートを迎えるのだ」

「あの方をですか」

「そうだ、勇士が帰って来たのだぞ」

「けれどハーゲン」

グートルーネは曇った顔のままハーゲンに言葉を返した。

「ジークフリートの角笛は」

「青ざめた勇士はもう角笛を吹かない」

「えっ!？」

それを聞いてであった。グートルーネの顔はさらに曇る。そうして彼に問うのだった。

「では後ろのあの人達は何を」

グートルーネは兄と家臣達が沈痛な顔で何かを運んで来るのを見ながらハーゲンに問うた。

「何を運んで来るといいます?」

「猪に後ろからやられたのだ」

ハーゲンはそういうことにしたのだった。

「それによって御前の夫は」

「そんな、あの方が……」

「グートルーネ」

グンターは妹に優しい声で告げてきた。

「落ち着くのだ、ここは」

「そんな、そんな筈がないわ」

グートルーネはすぐに事情を察した。これは勘で、である。

「あの方がそんな。猪に背を向ける筈もないし」

「それはだ」

「近付いてきても振り向ける。それなら」

「ここまで考えてである。答えを出したのである。」

「貴方達があの方を」

「私ではない」

グンターは己の罪から逃れた。そうせねば耐えられなかったのだ。

「その言葉を私に向かって言うな」

「ではまさか」

「そうだ、ハーゲンだ」

ハーゲンを指差して言うのだった。

「彼こそその呪わしい猪だ」

「ハーゲンこそが」

「そうだ、この男が彼をだ」

「それで私を恨むというのか？」

「不安と不幸が永遠に御前を捉えるのだ」

「そう言うがだ」

ハーゲンは反撃に出た。

「あの男は偽の誓いをしたのだ」

「それはそうだが」

「そして私の槍に誓っていた」

ハーゲンは自分のその槍を前に突き出して語る。

「その誓いの通りにしただけだ」

「それで私の夫を」

「そしてだ」

ハーゲンはさらに言ってきた。

「神聖なる獲物の権利を手に入れたのだ」

「神聖な獲物だと？」

「そうだ」

まさにその通りだというのである。こうグンターに返すのだった。

「ジークフリートの手の中にあるその指輪を貰おう」

「それは違う」

グンターもここでは強気になった。毅然として彼に言い返す。

「その指輪は御前のものではない」

「では誰のものだというのだ」

「指輪はグートルーネのものだ」

そうだというのである。

「彼の妻だったグートルーネのものだ」

「諸君に問う」

ハーゲンは周囲に顔を見回してから彼等に問うた。

「指輪は私のものだな」

「いや、それは」

「どうなのか」

しかしであった。彼等はその言葉には目を伏せた。賛成できないというのだ。

「やはりその指輪は」

「グートルーネのものではないのか」

「彼の妻だった」

「確かに」

「くっ、それではだ」

ハーゲンは一歩前に出た。そのうえでジークフリートに向かおうとする。その前にだ。

第三幕その九

グンターが出て来てだった。彼の前に立ちはだかって言うのだ。

「グートルーネのものに手を触れるというのか」

「だとしたらどうするのだ？」

「それは許さん」

ここで彼は剣を抜いた。ハーゲンは槍を手にしたままだ。

「アルプの子よ、下がれ！」

「黙れ！」

しかしここでハーゲンは叫ぶ。

「そのアルプのものをアルプの子が要求するのだ！」

「何だと!？」

「指輪は私のものだ！」

グンターが指輪のことを聞いて驚いているところに槍を突き出した。グンターは家臣達が二人の間に入るより先に胸を貫かれた。そうしてその場に背中から倒れてしまった。

「グンター様！」

「何ということをして！」

「指輪だ！」

ハーゲンは庭の中央に置かれているジークフリートの亡骸に駆け寄りその指輪を奪おうとする。するとそのジークフリートの亡骸がだ。

不意に指輪をしている左手を上突き出してきたのだ。仰向けになっっている彼の亡骸がである。

「なっ!？」

「亡骸が!？」

「何故」

「生きている、いや違う」

ハーゲンはそのジークフリートの亡骸の前で立ち止まってしまっ

た。そのうえで言うのだった。

「死んでいる。しかしこれは」

「全ては終わろうとしています」

そうしてだった。庭にだ。今ブリュンヒルテが出て来たのだ。その姿はこれまでとは違っていた。神であることを取り戻した様に神々しいものだった。

その彼女が来てだ。そうして告げるのだった。

「貴方達の嘆きも今は何の意味もありません。私は今復讐の為にここに来ました」

「復讐に」

「何の復讐に」

「貴方達全てに裏切られたその復讐にです」

こう言いながらだ。ジークフリートの亡骸の枕元に来たのである。そしてまた言うのであった。

「気高い英雄の死に相応しい嘆きの声は私の耳には聞こえません」

「貴女が来たことで」

グートルーネは恨みに満ちた目で彼女を見ながら責めてきた。

「あの方も兄上も」

「哀れな女よ、黙るのです」

しかしブリュンヒルテは彼女を一瞥してこう言うだけだった。最早彼女のことなぞ何でもなかった。今のブリュンヒルテにはだ。

「貴女は彼の妻ではありませんでした」

「では私は」

「ジークフリートの妻は私」

このことをはっきりと告げた。

「ジークフリートが貴女に会う前に私に永遠の契りを誓っていたのだから」

「では私は本当に」

それを聞いてだった。グートルーネはその場に崩れ落ちてしまった。

家の女達が彼女を何とか立たせようとする。しかしだった。

「私は全て踊らされていただけ。ハーゲンによって」

そのまま崩れ落ち動かなくなってしまった。ブリュンヒルテはもう彼女を見ておらず、厳かに告げるのだった。その厳粛な面持ちで。

「ラインの岸辺に大いなる薪を積み上げるのです」

「薪を」

「それをですか」

「そうです。そして勇士の亡骸をそこに」

誰もが言われるままだった。ジークフリートの亡骸をそこに置いて薪を積んでいく。ブリュンヒルテはそれを見ながらさらに命じるのだった。

「グラーネを」

「グラーネ？」

「彼の馬です」

それをだというのだ。

「かつては私が乗っていたその馬を」

「ではその馬に乗られて」

「ここを去られるのですか」

「そう、この世を」

この場ではなかった。この世である。ハーゲンはこの間身動き一つできなかつた。完全にブリュンヒルテの神性の前に人形となっていた。

そうしてだった。ブリュンヒルテはさらに言うのであった。

「私はその馬で彼の後を追い勇士のいと聖なる誉れを分かちたいのです」

「それが貴女の望みなのですか」

「そうです。そして」

言葉は続く。

「彼の光は日光の様に私に明るく輝きます」

今度はジークフリートを見て言っていた。

「私を裏切った無二の清き人、私を欺き友に信義を尽くした人」
ジークフリートのことに他ならなかった。今彼は薪の中に横たえ
られている。そして薪はその周りに次々に積み重ねられていく。

第三幕その十

そうしてだった。ブリュンヒルテはそれをさらに見ながらだった。

「このうえなき貞節を尽くした信頼すべき妻を剣で隔てた人。貴方以上に誓いを重んじた者はなく忠実に約束を守った者はなく」

紛れもなくジークフリートのことだった。

「貴方以上に純真に愛した人もなかった。ですが」

薪の山の中のジークフリートを見ながらさらに言っていく。

「貴方以上に全ての誓い、約束、誠ある愛を偽った人もいない」

だがそれは今は愛しみと共の言葉だった。

「どうしてそうなったのか。神聖な誓いを守るべき神々よ」

今度は上を見上げての言葉だった。ヴァルハラをだ。

「貴方達のまなざしを私の限りなき苦しみに注ぎその永劫の罪を悟って下さい」

彼等を責める言葉である。

「ヴォータン、我が嘆きを聞いて下さい」

「ヴォータンに」

「それを」

「貴方が切に望んだ彼の最も勇敢な行いを彼が行ったというのに」
ヴォータンを見上げながら言っていく。

「貴方は自身の陥るべき呪いに彼を陥れたのです」

次の言葉は。

「一人の女が知を得る為に無二の清き人は裏切りを行わなければならなかつた、貴方が何を欲しているのか私が何を知っているのかとお尋ねですか」

ヴォータンを責め続ける。

「私は全てを知っています。私は全ての束縛から放たれたのです、そして貴方の烏の羽ばたきも聞こえました」

ヴォータンの僕であるその烏だ。

「貴方達が待ち焦がれている便りを彼等に託します。神々よ」

ジークフリートを覆うその薪に手をかざすとであった。その中から指輪が出て来た。それを自身の手に持ってまた言った。

「さあ私の相続すべきものを私自身のものとした」
そうしてである。

「この呪わしく恐ろしい指輪を手にしたがすぐに手放しましょう」

「馬鹿な。その指輪は」

ハーゲンはそれを聞いて顔を青くさせた。

「私の」

「ラインの乙女達よ、貴女達が熱望しているそれを返しましょう。」

私の灰の中からそれを持って行くのです、私を燃やす火、ローゲが
その神が遂に出て来た。

「彼が指輪の呪いを解いてくれます。貴女達はその指輪を溶かし輝
かしい黄金に戻し清らかに守るのです」

そうせよと。彼女達にも告げた。

「奪われた故に災いをもたらしたその指輪を」

夜の空に烏を見た。その彼等にも言うのであった。

「烏達よ、全て伝えるのです。全てを」

さらに言っていく。

「今全てが終わると。炎の神ローゲ、私の古い友人よ」

ローゲが長い間己を守っており実質的にジークフリートを導いて
くれたことへの感謝への言葉だ。それを話しながらだった。

「私は今誇らかなるヴァルハラを貴方に任せます。そして私自身も」
彼女はその手に火を持っていた。そのうえで薪の前に進み出てそ
こにそれを放ち。烏達を見ながら火が自らを赤く照らすのを感じて
いた。

そこにグラーネが連れられてきた。彼女をいとしげに撫でてから
であった。

「グラーネ、今から私達は私達の行くべき場所に行きます」

こう告げるのである。

「これから永遠に。貴女も愛したあの人の場所へ」
ジークフリートは最早炎の中に包まれている。その炎を見てである。

「ローゲが私達を導いてくれます。私達を永遠の契りに」
最早それまでだった。グララーネに乗り彼女をいなかせて。

「グララーネ、最後の挨拶を」
そして彼女もまた。

「ジークフリート、見て下さい。貴方の妻が歡喜に溢れて今挨拶をするのです！」

そのままグララーネを炎の中に飛び込ませた。彼女もその中に消えてしまった。炎は天に伸びていく。

そこに洪水が来て人々はそれから逃げる。その中にあの乙女達がいいた。

そしてその手に指輪が渡ろうとする。ハーゲンはそれを見て咄嗟に動き叫んだ。

「指輪に近付くな！」

しかしだった。彼は乙女達に水の奥に引き込まれて消えてしまった。青い世界の中で今乙女達はその指輪を手にし永遠の喜びを味わう。指輪は輝き続け静かにラインの中へと消えていく。誰も辿り着くことのできないその中にだ。

炎はさらにあがっていく。そしてまずはヴァルハラに向かわんと天を駆けるアルベリヒの軍勢に襲い掛かり彼等を全て焼き尽くしてしまった。

それからヴァルハラも包み込んだ。神々はそこから逃げようとするがヴォータンは己の玉座から立ち上がり両手を掲げそれを受けた。ヴァルハラもまた炎の中に消え去った。

ローゲは全てを焼き尽くすとそのまま何処かに去ってしまった。指輪をその手に戻した乙女達は青い水の中で輪舞を舞いながらその奥へ消えていく。残ったのは人間達だった。神々は去り彼等の時代がはじまるうとしていた。その彼等の時代がだ。

神々の黄昏 完

舞台祝典劇ニールベルングの指輪 完

2010・2・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019o/>

神々の黄昏

2011年4月28日01時10分発行